日本醫史學雜誌

(復刊第3號)

第5卷　第3號

昭和30年3月1日發行

原著

敦煌本食療本草に對する文獻學的研究(1)……渡邊幸三…(1)
德川時代の救急法書……三浦豐彦…(9)
永富獨嘯庵の師蘭陵禪師……田中助一…(13)
和蘭醫話の研究(3)……內山孝一…(15)
朝鮮疾病史(3)……三木榮…(25)

史料

緒方洪庵歌集(3)……(36)

研究餘録

日本中世古版醫書年表(1)……石原明…(24)

雜報

北宋の五藏模型發見・幕府舊藏の蘭書出現(12)，伏屋素狄 資料の發見・億川理事逝去(15)，例會記事(50)

通卷第1337號

日本醫史學會

日本醫史學會役員

理事長　内山　孝一

理　事　阿知波五郎　安西　安周　石川　光昭
伊東爾惠治　今田　見信　梅澤彦太郎
浦本政三郎　緒方　富雄　小川　鼎三
大久保利謙　大鳥蘭三郎　大矢　全節
岡西　爲人　黒田　源次　杉　靖三郎
竹内　熏兵　龍野　一雄　中野　操
長谷部言人　比企　能達　藤井　尚久
三木　榮　三廻　俊一　宮本　璋
山崎　佐　山田　平太

評議員　青木　大輔　赤澤　乾一　赤松　金芳
伊良子光義　板垣　政參　岩崎　克己
王丸　勇　緒方知三郎　勝沼　精藏
川井銀之助　木村　康一　桐原　葆見
國友　鼎　熊谷　岱藏　佐武安太郎
佐藤　美實　三枝　博音　清水　多榮
清水藤太郎　杉原　德行　鈴木　宜民
田中　助一　竹内松次郎　津崎　孝道
暉峻　義等　原島　進　平塚　俊亮
廣瀨　常雄　福田　得志　三田谷　啓
村上　秀　森田　幸門　藪内　清
山形　敞一　吉岡　博人　和田　正系
和田　豐種

幹　事　石原　明　杉田　暉道

（五十音順）

投稿規定

一、論説はすべて他誌に未發表のものに限る。本誌の論説は再投稿又は轉載を謝絶する。

二、本誌に投稿しようとする者は會員たることを要する。

三、原稿及び寫眞・圖表は簡單明瞭なことを望む。製版代は實費を投稿者の負擔とする。

四、別刷は十部に限り無料贈呈する。實費を負擔されても十部以上はできない。

五、原稿は一篇につき原則として四百字詰原稿用紙十五枚、圖版五個以内とする。

六、原稿は縱書、平かな、新かな遣いとし、引用文は『』を附し原文のまゝとする。漢文は白文または讀下しにすること。

七、原稿表紙には必ず英文題名及び著者名をローマ字にて附すること。

八、特別の場合のほか校正は編集係が行う。

九、原稿の載否、掲載順序は編集係に一任のこと。

十、原稿は書留郵便を以つて本學會編集係宛郵送のこと。

敦煌本食療本草に對する文獻學的研究

渡邊幸三

一、序說
二、敦煌本食療本草の概要
三、食療本草の著者
四、食療本草著述の經過
五、食療本草の傳存
六、敦煌本食療本草の性格
七、敦煌本食療本草の書式
(1) 藥名の書式
(2) 藥性の書式
(3) 本文の首章の書式
(4) 「案」の書式
(5) 「案經」の「經」の意義
(6) 朱點、又朱字又方朱字の書式

一、序說

食治、食療は神仙食餌、醫療服藥と共に、中國の本草醫學を形成する重大な要素である。この食療の智識は遠く山海經に淵源し、禮記內則篇等呂氏春秋盡數篇本味篇等淮南子の諸書を經て、前漢時代に既に「神農食禁七卷」漢書藝文志に著錄なる專書もでき、又周禮には「食醫」なる制度が擬制されている。その後唐に至るまでは、食療研究はいよ〳〵盛んとなり、隋志、兩唐志には多くの專書が著錄されている。この風は早くも我國にも傳わり、醫療、食生活に多くの影響を與えた。

しかるに、この食療關係の書は殆んど亡佚し、僅かに唐の孟詵の食療本草が醫心方、證類本草に殘存しその一斑を知り得るに過ぎなかつた。一九〇七年に至つて、英人スタイン博士の手によつて、舊鈔本の食療本草の殘簡が、敦煌から出土された。この原簡はロンドンの大英博物館に架藏してあるが、之を世にはじめて紹介したのは、民國十四年一九二五に羅振玉が印行した敦煌石室碎金に收錄された「食療

本草殘卷」である。此は羅氏が寫眞から複印したもので、王國維、唐蘭及び自跋が附されている。羅氏はその原本を見ていないが爲に、背紙に言及せず、又朱點朱字を一律に墨書している。之については、昭和五年に中尾萬三博士が發表された「食療本草の考察」上海自然科學研究所彙報第一卷第三號 がある。この論文は、同博士が海外遊學中、大英博物館に於て手寫されたのを基礎とし、醫心方、證類本草等の遺文を勘案し、その性格を究明すると共に、食療本草の複原をも意圖されたものであつて、「敦煌石室發見食療本草殘卷考」「食療本草遺文」なる二編から成つている。この論文は微に入り細を穿ちて考證した精緻を極めたものであるが、今文獻學の立場から見ると、若干の補正すべきと思われる點がある。本稿は專ら文獻學の立場から、敦本食療本草の性格を究明し、些にても、中尾博士に貢獻したいと思う。

二、敦煌本食療本草の概要

中尾博士の「食療本草の考察」以後「中尾博士」と言うのは、皆この本を指す。によると、敦本食療本草以後ただ敦本と略稱すの背紙は、「長興五年正月一日行首」なる年記のある牒文、その他書狀詩等が書かれたものである。背紙の文は、沙州文錄に見ゆ。この長興五年九三四は五代後唐の閔帝の時である。從つて敦本はその後遠からざる時に書寫されたものであることが知られる。一行は約二十字で、卷軸に表裝され、首尾を殘闕したもので、次の二十六條を殘存している。

石榴前半缺　木瓜中尾本は誤脫　胡桃、軟棗、棐子、蕪荑、榆莢、吳茱萸、蒲桃、甜瓜、越瓜、胡瓜、冬瓜、瓠子、蓮子、燕復子、檀子、藤李、羊梅、覆盆子、藕、鷄頭子、芰實、石蜜沙糖、芋後半缺

この二十六條は食療本草の全數二百二十七條に比すと僅かに十分の一に過ぎないが、それでもその內容に於て、書式に於て唐の舊態に近いものと思われ、寶遺すべきものであろう。次に敦本冬瓜の一條を例示することにする。（文中の文字の橫に一線を附したものは、朱字を示し、○は朱點を示す。又中尾本と羅本との異同は、文中に雙行で注しておく。句讀點は筆者が附した。）

「冬瓜。寒。右主治小腹水鼓恐らくは皷の誤脹。又利小便。止消渴。又其子主益氣耐老。除心胸氣滿。消痰止煩。又冬瓜子七升。絹袋盛。投三沸湯中。須臾曝乾。又中尾本は「又」を朱書す。この又は上の「投三沸湯中」に重ねて又湯中に內れるの謂で後述する書式としの「又」「又方」の「又」ではない。當然墨書すべきである。內湯中。如此三度乃止。曝乾。與滑苦酒。浸之一宿。曝乾爲末。服之方寸匕。日二服。令人肥悅。中尾本は「肥悅」の二字を雙行に小書す。今改めて大書にす又明目延年不老。○案經壓丹石。去頭面熱風。又熱發者服之良。患冷人勿食之。令人益瘦。○取冬瓜

一顆。和桐葉。與猪食之。一冬更不食諸物。其猪肥長三四倍矣。又煮食之。中尾本には、「一冬更不食諸物」よりこの「又煮食之」の十九字がない。恐らくは誤脫。今羅本に從う。能錬五藏精細。欲得肥者。勿食之。爲下氣。欲瘦小輕健者。食之甚健。羅本は「健」の下に「人」の字がある。又冬瓜人 羅本は「人」を「仁」に作る。今中尾本に從う。三升。退去皮殼。搗爲丸。空腹及食後。各服廿丸。令人面滑靜如玉。可入面脂中用」。

この冬瓜の一例によつて、朱字、朱點の入りまじる敦本の一斑を知り得るであろう。又冬瓜の條のみならず、敦本の各條を通じ、中尾本と羅本との異同は少くはない。原本を見得ない爲にその是非を明らかにし得ないが、少くともこのことからして、敦本は相當亂雜にかかれた抄本であることは推知するに難くはない。

三、食療本草の著者

嘉祐補注本草の編纂官なる掌禹錫等は、その引用した書の提要を、「補注本草所引書傳」大觀本草卷三十に見ゆの條下詳述べている。その食療本草には、

「唐同州刺史孟詵撰。張鼎又補其不足者。八十九種。並舊爲二百二十七條。皆說食藥治病之效。凡三卷」。

と說明している。食療本草は孟詵の撰で、張鼎が八十九種を增補して二百二十七條とした三卷の書で、食藥治病の効を說いたものと言うのである。後述するが如く、嘉祐注本草は孟詵云として多く食療本草を引用しているから、恐らく完本を見たものと思われ、從つてその言は信じ得るものであろう。

食療本草の著者孟詵には、舊唐書方技傳に、その列傳がある。それによると、汝州梁の人。今の河南省南陽府 武德四年六二一ごろ生れ、開元元年七一三ごろ卒した。諸官を經て、則天武后の長安年間七〇一—七〇五には、同州の刺史にまでなつた。又孟詵は幼少のころから方術を好み、特に神龍年間七〇五—七〇六に致仕してからは、專ら藥餌を事とした。從つて孟詵の食療本草の原本はこのころに成つたものであろう。又舊唐書孫思邈傳によると、千金方の作者なる思邈に師事したことが知られる。孟詵の著述としては、その列傳に「家禮一卷、祭禮一卷、喪服要一卷、補養方三卷、必効方三卷」が擧げられている。

次に孟詵の書を增補した張鼎には兩唐書に傳なく、ただ新唐書藝文志に「冲和子玉房秘訣十卷、張鼎」が著錄されておるのみである。案ずるに唐の陳藏器の本草拾遺は、上記の「補注本草所引書傳」によると、開元中の作である。更に又宋の錢易の南部新書によると、開元二十七年七三九に成つ

た書である。この本草拾遺は、假蘇の條に「張鼎食療云」（大觀本草巻二十八假蘇の條の唐慎微所引の「陳藏器」に見える）を引用し、鮀魚甲の條に（巻二十一鮀魚甲の條の嘉祐補注所引の「陳藏器」に見える。）を引用している。從つて張鼎は開元年間に活動し、二十七年以前に食療本草を作つたことは明らかである。又醫心方には、しば〳〵「脣玄子張云」「脣玄子張食經云」として食療本草を引用しているから、「脣玄子」と號したことが知られる。若し然らば、宋史藝文志の「悟玄子安神養生方一巻」も亦張鼎の作であろう。之を要するに、張鼎は開元年間の道士で兼ねて醫を善くしたものであろう。

四、食療本草著述の經過

前に引用した「補注本草所引書傳」によると食療本草は孟詵が作り、張鼎がその不足せるもの八十九種を增補して二百二十七種とした書である。しかるに舊唐書孟詵傳には補養方、必効方の名を擧げるのみで、食療本草に言及していない。此は何ごとかを意味するものであろうか。案ずるに、舊唐書經籍志は開元九年七二一に編纂された。「群書四部錄」を襲用したもので、專ら開元九年以前の書を著錄したものである。この舊唐書經籍志にも亦補養方三巻、必効方十巻を著錄するのみで、食療本草を著錄していない。しかるに前記の如くに開元二十七年に成つた本草拾遺には、「張鼎云」「張鼎食療云」を引用し、開元九年以後の書をも著錄した新唐書藝文志には「孟詵食療本草三巻」を著錄している。此等の事實と、前記の「補注本草所引書傳」とを併せ考えると、孟詵には食療本草なる書名の書はなく、孟詵の作つた某書に就いて張鼎が增補してはじめて食療本草なる名が與えられたことが推定される。然らば張鼎が增補した孟詵の書とは如何なるものか。舊唐書列傳、藝文志の記載する範圍に於ては、補養方か必効方かと言うことになる。必効方に就いて見ると、舊唐書經籍志には「十巻」本が著錄されている。この十巻本に增補して、三巻本の食療本草にしたとは思えない。（列傳では必効方三巻としている。この三巻本に增補して、食療本草三巻としたことは考えられるけれど又唐の王燾が天寶十一年七五二に作つた外臺秘要方には、隨所に必効方を引用している。之を食療本草の遺文に對校すると、全く趣を異にした醫書であつて、食療本草が必効方に淵源したものとは思えない。從つて食療本草は補養方につき、孟詵が增補したと考えざるを得ない。「補養方」なる書名から推しても斯く考えるのが自然であろう。しかしこの考は、孟詵に本草醫書關係の書としては、補養方、必効方の二書しかなかつたことを前提としたもので、

此處に若干の不安が感ぜられる。補養方が全く亡佚した今日、之を積極的に證明することはできない。

更に又敦本には、しば〳〵「〇案經」なる語を用いている。「〇案經」は後に詳述するが如くに、張鼎が某經によつて、孟詵の書に增補したことを表示する書式である。この「經」の內容は明確ではないが、恐らく當時行われた崔氏食經、馬琬食經の類であろう。

以上を要するに、張鼎は恐らく孟詵の補養方を底本とし、當時行われた某食經により、藥品、記文を增補して、食療本草三卷を編纂したことになる。從つて食療本草なる書名は張鼎が命名したと言うべきであろう。

五、食療本草の傳存

次に食療本草の流傳經過について說明しよう。先ず中國に於けるそれを先に述べることにする。

新唐書藝文志には、「孟詵食療本草三卷」を著錄し、降つて宋史藝文志には「孟詵食療本草六卷」を著錄している。之により宋代には完本が存在していたことは明白である。又現に、宋の元豐五年（一〇八二）のころに、唐愼微が編纂した經史證類備急す本草を踏襲する大觀本草、政和本草の系統に屬する本草書（之等を一括して「證類本草」と呼ぶ）には多くの食療本草の遺文が殘つている。この證類本草に殘存する遺文には、嘉祐補注本草（以後は「嘉祐本草」と略稱す。）が「孟詵」として引用したものと、證類本草の編者唐愼微が「食療」として引用したものとの二系統がある。（證類本草に「食療」として引かれている文は、皆墨蓋子を冠した下方に書かれている。墨蓋子は唐愼微の續添を表示する記號である。中尾博士はこの「食療」をも、嘉祐本草の引用した文とされている。恐らく證類本草の書式に通曉されていなかつた爲であろう。）今この兩系統の性格に就いて考えてみるのに、共に張鼎が增補した食療本草であることは言うまでもない。（青粱米、冬瓜に所引の文によつて、事實上に證明される。）しかしこの兩者を對比すると、相當に異同が多い。上記の「補注本草所引書傳」によつて明らかであるが如くに、嘉祐本草所引の食療本草は三卷本である。しかるに宋史文志には「孟詵食療本草六卷」として六卷本を著錄している。上記の如くに、唐愼微所引の「食療」は、嘉祐本草所引の「孟詵」と異同が多い。この點を宋志著錄の六卷本と併せ考えると、唐愼微の「食療」として引用したものは、六卷本の食療本草であつたことが想像される。卽ち宋代には三卷本と六卷本との二系統の食療本草があり、前者は嘉祐本草に、後者は唐愼微に引用されて、夫々現今に殘存しているのである。

更に又この兩系統の食療本草を敦本に對校すると、この兩系統の食療本草が任意に摘錄されたものであることを考

慮に入れても、これまた異同が甚しい。この事實から推すと、敦本は唐の舊態に近いものであるが、戰亂によつて殘佚し、宋に入つて校訂の際、相當に思いきつた改編が行われ、遂に三卷本と六卷本との兩系統に分かれたものと考えられる。このことは、食療本草の遺文を利用するに際して特に注意すべき所であろう。

上記の如くに、食療本草は宋代に完本は流傳していたが原形を留めないまでに校改はされたが…元以後の官私藏書目錄に食療本草を著錄したものを見出し得ない。恐らく宋元の間に亡佚に歸したのであろう。中尾博士は、明の李時珍の本草綱目に引用されている食療本草には、たとえば鯽魚の條の如くに、證類本草にない文が時々有る所からして李時珍は完本食療本草から引用したと考えていられる。しかし李時珍の引用態度は誠に粗雜で、多くの增改を行い、他最を引用して別書の文とすることもしばゞ見受けられる。中尾博士の如くに推定することは、李時珍に關する限り危險と言うべきであろう。

次に我國に於ける存佚に就いて見ると、相當に舊く我國に將來されたと思われる。寛平年間八八九—八八九七 に作られた藤原佐世の日本國見在書目錄には、馬琬、崔禹錫等の食經などと共に、「食療本草三、孟詵撰」が著錄されている。又延長年間九二三—九三〇 に源順の作つた和名聚聚抄に引用されている。「食療經」（卷二葦垂類陰核、病類近目、失聲等の諸條）は果して食療本草であるかは明確ではないから之を別とし、永觀二年九八四 に丹波康賴が著した醫心方には、相當に多く食療本草が引用されている。

醫心方は食療本草を「孟詵云」「孟詵食經云」「脣玄子張云」「脣玄子張食經云」として引用している。しかしその大部分は共に「食療本草」の意味であつて、「孟詵云」とあるからして、之を孟詵の言とし、「脣玄子張云」とあるからして、之を張鼎の語であると速斷することは許れない。（中尾博士は之を明確に意識していられないために、その立論には、種々の混亂ができた）ただ「孟詵云」「玄脣子張云」を同一條下に連引されている場合のみ、孟詵の語と張鼎の語とは區分し得られるのみである。（卷三十の海藻、椹胡瓜、白粱米、喬麥、胡麥、水斤、白苣等の諸條がこれに當つている。）醫心方は約十條孟詵、張鼎の語を連引していることによつて、醫心方の見た食療本草は、何らかの記號、書式又は文字によつて、孟詵と張鼎との語が區別されていたことが知られる。（證類本草に殘存する遺文は、かかる區別をする記號、文字は無視されている。）恐らく唐の舊態を傳えたもので、日本國見在書目錄に著錄されている食療本草そのものか、又はその直系に屬するものであろう。

醫心方より以後、この書の流傳は明らかではない。恐らく平安鎌倉の間に亡佚したのであろう。（中尾博士は、竹田昭慶が康正二年（四五六）に作った延壽類要は、恰も食療本草の原本から直接引用したものの如くに取扱つていられるが、それは皆、證類本草のそ

れを摘錄したものに過ぎない。）

以上の如くに、食療本草は日華共に早くも亡佚に歸し、醫心方、證類本草の徵引する所によつて、その一斑をしのぶに過ぎなかつた。しかる所、一九〇七年に敦煌から殘簡ながらも舊抄本食療本草が出土した。恐らく唐の舊態に近いものであろう。

六、敦煌本食療本草の性格

上記したが如くに、この敦本は後唐の長興五年九三四の年記のある牒文等の背紙に書かれたもので、首尾は殘闕してしまつている。しかし之を醫心方、證類本草等に在る食療本草の遺文と對校すると、その書式、文の順序、文字等に異同は多いが、それでもこの敦本は食療本草の殘簡であることは斷言できる。今之を醫心方の遺文に對校すると、醫心方は丹波康賴が引用するに際して、その要領を摘錄した條が多いことを考慮に入れると、この兩者は割合によく合致する。從つてこの兩者ともに、唐の食療本草の直系に屬するものであり、共に「三卷本」であることが知られる。しかし敦本を嘉祐補注所引の「孟詵」、唐愼微所引の「食療」に對校すると、その文は異同が多い。此は前記の如くに、宋に入つて食療本草は相當に思いきつた改編が行われたことを意味するものと思われる。ともかく、敦本は中尾本と羅振玉本との間に異同が多いことからして、亂雜な抄本であることが推定され、その爲に誤字脫字も多いのであるが、それでもその書式等に於て、唐の食療本草の舊態に近いものであろう。この敦本によつて、その書式を究め、その書例によつて證類本草等に殘存する遺文を分析したならば、必ず食療本草複原への手がかりを得られるものであろう。

七、敦煌本食療本草の書式

概して言えば、本草醫書には記號、文字等によつて特別な意味を表示する書式のものが多い。特に次から次へと別人によつて增補されている書に於いては、その書式はます〳〵複雜となつて行く。今本草經を例に取つて見ると、神農本經原有の藥品名、記文を朱で書し、陶弘景が名醫別錄によつて補入した藥品名、記文を墨で書してその區別を明らかにしている。この書式ははるか證類本草にまで傳統している。この傳統的書式をはじめて破つたのは、恐らく宋の新編類要圖注本草であろう。更に注文に於ても、唐本草のその注文の上に「謹案」の二字を冠して陶弘景の集注と區別し、嘉祐本草に至つては、その總序に見える「十五凡」の如くに、十五種の書式を設け、證類本草に至つては、更に複雜となつている。食療本草も本草書で

ある以上何かの書式の下に、孟詵の文と張鼎の增補の文とが區分されていたのではないかと疑われる。

前述したが如くに醫心方は同一條下に、「孟詵云」「脣玄子張云」を連引している。このことはその依據した食療本草が孟詵と張鼎との語を區別する書式の下に書かれていたことを意味するものであろう。

今之等の點を考慮に入れて敦本を見ると、朱點、朱字、「案」「案經」「又」朱字「又方」朱字が入りまじつている。之等は必ず何かを意味する一定の書式が有ることを思わしめる。次に敦本の各種の書式に就いて考えてみたい。

（1）藥名の書式　敦本はその所存の二十五種の藥名を皆朱筆で書いている。王國維の敦煌石室碎金の食療本草殘卷跋には、

「其藥名皆朱書。余所見唐本周易釋文之卦名。唐韻之部首皆然。但用以與餘文識別。更無他義。」

とある。唐抄本周易釋文、唐韻が夫々卦名、部首を、檢索の便に資す目的で朱書していることから推して、食療本草が藥名を朱書するのも、全く檢索の便のためであると說明している。中尾博士もこの說に贊成されている。

上記したが如くに、本草經の書式は、本經品の藥名を朱書し、名醫品を墨書している。且つ後述するが如くに敦本には種々の書式の下に書かれている。從つてこの藥名の朱書は單に檢索の便とのみ解すことは條件なしには承認しがたい。前記の如くに、食療本草は、孟詵の一百三十八種に、張鼎が八十九種を增補したものである。之を本草經の書式に照し、孟詵原有の品名は皆朱書し、張鼎の增補の品名を墨書した。敦本はたま〳〵孟詵原有の藥品のみを存するが故に、皆朱書されているとも解し得られる。新修本草は、陶弘景の本草經の藥品の次に、同部同品の藥品を增補するのが例である。張鼎も恐らくこの例にならつたものであろう。王國維說の如きは本草の書式を無視したもので從い難い。

徳川時代の救急法書

三浦豐彦

一

私は最近ぼつぼつ私共に關係のある衞生史の資料を集めながら、これに關する小文を發表して來たが、その際救急法書のいくつかも心掛けて手許に集めてみた。そこでこれを年代順にならべて御參考に供すると共に、私の眼にふれなかつたものについて識者の御教示を得たいと考える次第である。

現在でも民間には赤本と稱する應急處置を集めた書物が流布しているのだが、徳川時代の救急方書も多分にこうした赤本的な意味をもつていたのであろうが、そうかといつて全然醫家に不必要なものとも見えない。特に初期に出版されたものは醫科の應急處置集ともいえる程度のものであつたようである。

二

まず取り上げるべきものとしては徳川吉宗の享保十四(一七二九)年に幕府の命によつて林良適と、丹羽正伯が著した普救類方七卷十二冊がある。林良適は小石川藥園の養生所の醫員であり、丹羽正伯は有名な本草學者稻生若水の庶物類纂一千卷を增補完成した一人である。二人とも有名な幕府の醫官であつたようである。

この「普救類方」は上記の二人が幕府に集藏されている書物の中から、山や野で得られ易いようなものを選んで處方しているのである。卷の一の上の見返しに次の文字が見られる『今四海昇平之日、兆民鼓腹而樂、何慮之有乎、所可憂者、其唯疾病耳、雖然於都下大邑也、不乏明醫良藥、若夫邊鄙窮鄉、則反之、故每遇沈疴卒症、乃闔境束手、而俟其斃焉、可悲之甚也』これを救うために官は仁德にもこの書を官刻させたというのである。

翌年の享保十五(一七三〇)年の五月にはこの官刻普救類方を諸國へ配布することを命じている。

卷の一上は頭之部頭痛の療法からはじまつている。卷之六は婦人と子供に關するものであり、卷之七は諸藥圖、藥種製法となつている。皇國醫事大年表(註一)が本書を十二卷としているのは一冊を一卷とかぞえたので、七卷十二冊の書物である。

註一、(中野操：皇國醫事大年表一四二頁昭和十七年刊)

三

「普救類方」からおくれること六〇年、德川家齊の寛政元(一七八九)年に多紀家の六代、藍溪多紀元悳が「廣惠濟急方」を著わした。

この「廣惠濟急方」は上中下三卷よりなり、その療法等も仲々今から考えると面白い記載がされている。しかし勿論大面目だつたことは間違いない。これについては前に紹介したこともあるが(註二)(註三) ここでその一つ二つをもう一度ひろいあげてみることとしたい。例えば上卷にある中暑——これは今の熱中症にあたるわけであるが——の療法として、急に冷氣や冷水をあたえるのはよくないので倒れた人を『日陰の内に臥しめ途中道傍の熱土塊を堀り取りくだき病人がのむか又は臍の上に積みおき最中に窩を作りて中へ他人をして多く小便をさせて熱氣を透さしむ可し…』と書いてある。又下卷の雷震死については雷にうたれ輕くて氣絶している時には『其人を仰に臥し胸腹の上に活鮒をおきその鮒動搖は忽ち蘇るなり…』等と記載されている。

この著者多紀元悳の歿した享和元(一八〇一)年に「鄕里救急方」という簡單な一冊の書物が藝州の蘭江堂から出版されている。內容は「廣惠濟急方」を抄記したもので、特に民間人が醫者をよぶ前の救急の用にしようとしたものであろう。この書は「皇國醫事大年表」には記載されていない。

以上の「普救類方」・「廣惠濟急方」・「鄕里救急方」の表紙は筆者所藏のものを寫眞で既に紹介したことがある。(註二)

「鄕里救急方」の出版された享和元年に今一つ、救急選方という書物が出ている。この書は丹波元簡の著で今までの上記三書が全て和文であつたのに對して、漢文になり主として醫家の用に供したもののようであるが多紀家の書物として「廣惠濟急方」の流れをくむものである。上下二冊からなつて居り、筆者の所藏するのは文化七(一八一〇)年版で丹波元胤の跋がついている。

(註二、三浦豐彥 通說衞生史(その九) 勞働の科學 八卷六號 昭和二十八年)

(註三、三浦豐彥 通說衞生史(その十) 勞働の科學 八卷七號

昭和二十八年)

四

上記の「鄕里救急方」が他の本の抄本であるのとちがつて、文化八(一八一一)年に出版された「賜民藥方」は阿部正右衞門正興の編著である。全部で二十頁ばかりの小冊であるが、著者が自ら種々の療法を集めたもので、家傳の療法も集錄したといつている。病犬にかまれた時の療法からはじまつているこの書も、皇國醫事大年表に記載がない。著者についてもよく知らない。

ここで救急法をとりあげればどうしても軍陣醫學書も忘れることは出來ないであろう。

軍陣醫書としてまず眼につくには原南陽著わす所の「砦草」である。この書は文化元(一八〇四)年に初版が出され、筆者藏の再校版は文政元(一八一八)年の出版でポケットに入る位の小形本であるが、內容は廣惠濟急方からそれ程進歩したものとも思われない。

その後私の手許にある救急法書は數十年間とんでいる。卽ち一八五〇年代になつて二冊の軍陣醫學書と一冊の救急法書が眼につくのである。

米使ペルリが來朝して海內騷然たる嘉永六(一八五三)年に平野元良が「軍陣備要救急摘方」を出版し、更に安政三(一八五六)年にその續編を出している。繃帶法や止血法等は近代のものに近い。

同じ頃嘉永七(一八五四)年に三州田原藩の藩醫萱生玄順が原南陽の「砦草」にならつて「續砦草」を著した。同書は出羽の伊藤鳳山が序文で言つているように『…所、載皆夷方也。乃嘆曰。嗚呼。傷我士卒者。夷之虜賊也。救其傷者。夷之藥方也。…』といつているように、本の體裁にくらべかなり進歩したもので、止血法等も救急摘方と同じように現代のものに近い。外傷も素人療法をいましめている。この書も皇國醫事大年表には記載がない。

一般の救急法書として最後にあげておきたいのは安政四(一八五七)年に出た「救急撮要方」である。本書は横十六糎、縱七・五糎の横長の極小形本で、やはり皇國醫事大年表にも記載がない。著者は丹波元佶の序によると隱士默翁ということになつて居り、凡例の末尾には蘿蔔紅人という文字が見られる。この著者についても廣く御教示を得たい。序文や凡例によるとこの書物も先の多紀家の濟急方と救急選方の二書をもととして、もれた處置法をおぎない『此書は素人の急病を救得らるべきことを旨としたるもの

なれば行旅の輿中または戍兵の在軍などにこれを懐とし…（以下略）』とその凡例で書いているように素人用に編集されたものである。本書の末尾に書物の廣告が載つている。即ち「救急撮要方拾遺」嗣刻という文字が見られる。これによると本書の拾遺があつたようであるが、筆者未見である。尙「救急摘方」前後編の廣告も見られる。

以上私の手許にある書物を紹介したにとどまつたが、先輩諸氏の御教示を得て、補足を後日に期したいと考える。

雜報 1

昭和二十九年はわが醫史學界にとつて三つの大發見が得られた。何れも從來全く知られなかつた貴重な資料で、今後の研究の成果は今までの日本醫學史に大改訂を加えるに足るものがあるであろう。概要を餘白をかりて紹介する。

北宋の五藏模型發見

二月下旬、京都の嵯峨清涼寺釋迦堂の本尊であるいわゆる三國傳來の釋迦如來立像（國寶木彫）の背中に蓋のあることが判り、これを開いた處、胎内より多くの古經・古錢・布片・文書が發見された。中でも最も貴重なものは布製縫いくるみの五藏模型が製作當時のまゝ損傷少く出胎したことである。この五藏模型は中國醫學の常識とは全く異り、中に香や玉や舍利が藏され、梵字が書かれている。製作者も年代もはつきりしているので恐らく現存する五藏模型としては最古のものであろう。胎内奉納物は美術工藝のあらゆる分野に新しい課題を與えるので、七月に京都博物館を中心に各分野の專門家による綜合研究會が發足、近く詳細な研究成果が公表されることになつた。平安時代及び宋代の醫學史に大きな訂正が行われることは必定で、佛教醫學の解明に大きな期待がかけられている。

幕府舊藏の蘭書出現

德川幕府所藏の古渡蘭書は今まで一部分しか知られていなかつた。そのため醫史學のみならず近代の日本文化史の源流をなした蘭學の眞相が判らず、傍證となる文獻から直接に推測するそしりを免れなかつた。然るに四月に上野圖書館の書庫内で舊幕引繼の蕃書調所天文臺等を主とした舊藏蘭書四千册が發見され、關係各方面に異常な興奮を起した。早速蘭學史の各專門家により分擔研究が始められることになり、蘭學資料研究會が發足、會長は緒方富雄教授、醫學部門は内山孝一教授と大鳥蘭三郎講師が委任され、十二月に第一回の公開展觀（別報）が行われた。

伏屋素狄の實驗記錄（別報）

永富獨嘯庵の師蘭陵禪師

田中助一

永富獨嘯庵は明和三年(一七六六)に三十五歳で死んだ少壯醫人であつたにもかゝはらず、その名聲が後世にまで高いのは、天賦の奇才に加えるに儒學を山縣周南や服部南郭や太宰春臺等の碩學にまなび、醫學を山脇東洋にまなび、その上禪を蘭陵禪師や月海禪師(賣茶翁)等におさめて刻苦修養したからである。

蘭陵との關係は、獨嘯庵の實弟小田亨叔(ゴウシユク)(名は泰、号は濟川、長府藩校敬業館の學頭となつた儒醫)が書いた「行狀」に「年二十五歳、一切飲博亡賴の交を絶ち、薙髮して獨嘯庵と号し、禪を蘭陵和尚に問ふ。一火爐を開き蒲葦を御せず、妻孥を視ざるもの數月なり。親戚之を憂ふ、和尚これが爲に軟諭して而して後故に復す。修學精勤率ね是の如し」とあることによつてわかる。二十五歳の年は寶暦六年(丙子)であり、この年九月幕府は獨嘯庵が實兄勝原吉太夫と共につくつていた砂糖の檢査に役人を長府に派遣したので、藩當局は藩のため不利な結果を來たすことを恐れて、前もつて兄弟を禁錮したことがある。その時獨嘯庵は自分等の製糖が不正でないことを確信し、笑つて問題にしなかつた。役人がしらべた結果何等不正な點もなく、製品も良いものであつたので、大いに驚いてそのことを幕府に報告した。よつて幕府は兄弟を賞し、更に關東や山陽諸國にその法を頒つて製造を奬勵したのである。蘭陵は生國は明かでないが、名は越宗といひ、字ははじめ草盧と号し、蘭陵とあらため、また草庵とも稱した。禪を長門國大津郡深川の曹洞宗の古刹大寧寺の名僧無隱禪師(同寺第三十三世、寶暦六年十一月二十六日に六十歳で歿した)におさめ、高足をもつて稱せられた。寶暦十年十月十四日福岡藩の東鄙圓清寺(現在の福岡縣朝倉郡志波村政所)の七代住職が死んだので、その後をついで八世となり、數年在職した。

人となり輕妙酒落であつて、夜雨を愛し、雨の夜には終

夜香を焚き兀坐していた。村人ははじめその名を知らなかつたので、勝手に雨夜和尙と呼んだ。よつて蘭陵はその言を奇とし自ら夜雨禪師と稱するにいたつた。明和八年十二月頃伯耆國の曹源寺（現在の鳥取縣東伯郡三朝町大字曹源寺）の十四世住職に轉じ、安永八年（一七七九）七月二十三日に中西村の草庵において遷化し、二十五日に曹源寺に本葬した。行年は明かでない。著書には「草庵稿」・「樵歌」・「琴譜十二章」などがあつた。

「草庵稿」（詩集）は明和七年に刊行した半紙版二冊本であり、卷頭に天台沙門金龍敬雄撰、岸公實書の序（明和七年正月）蘭陵越宗自撰自書の序（明和六年冬）獨嘯庵撰の夜雨禪師傳がついてゐる。獨嘯庵の文はつくつた年月が書いてないが、「參學弟子、長門赤馬關獨嘯庵永鳳謹撰」とあることによつてその關係が明瞭である。書中「長府道中」・「功山寺」・「壇浦懷古二首」・「舟出赤關」などの詩によつて下關に巡錫したことが明かである。また獨嘯庵に關するものに次の二首がある。

喜獨嘯庵至

才氣睥睨海內高、風流蕭酒一時豪。不妨蓮社來投宿、但笑留君無濁醪

哭獨嘯庵（姓永富名鳳赤間關人也）

此夕梧桐鳳不棲。秋風蕭瑟月空低。炙簫獨望九霄外。吹斷哀情魂欲迷。

高野江鼎湖氏著「儒俠龜井南冥」によると、「樵歌」は獨嘯庵がその味あるを賞し、註を附けて公刊したということであるが、まだ一見の機會を得ない。また「琴譜十二章」は獨嘯庵の高弟で蘭陵にも師事した龜井南冥が獨り秘藏したといふ。同書に南冥の蘭陵と獨嘯庵に關する詩がかゝげてあるので、參考までにこゝに引用しておく。

僧蘭陵

舞鶴山邱誰氏墟。蕭然夜雨道人廬。江湖有跡雲相似。涇渭無心水自如。琴譜今應傳樂府。樵謠舊已比金書。最驚臨歿仍饒舌。遊戲佯狂不負初。

永富朝陽

嘗聞倜儻不羈言。始見斯人駭我魂。鬼谷揣摩行國遍。高陽飲博有徒繁。著書論世知無壽。辭聘逃名夙自髡。六尺遺孤風采在。如今遊事列侯門。

圓淸寺二十二代の現住職淵上玄瑞師の通知によると、本堂の正面に「施無畏」の三字額、山門に「圓淸寺」の三字額、山門の柱に「揷一莖草酬明主之恩（右柱）、開萬年基留忠聖

之義(左柱)」の聯、山門の横に「斷葷禁酒」(寶暦十二年夏書)その他の遺墨があるとのことであるから、書にも自信があつたものと考えられる。曹源寺は文化年間に全焼したので参考資料は残つていないという。(一九五四、六、二七)

雜報 2

伏屋素狄資料の發見

先年來、わが國の生んだ獨創的醫家、伏屋素狄の業績を研究していた内山理事長の示唆により、堺在住の三木理事が地元を鋭意探究中の處、はからずも富田林市に子孫の現存するのを發見、ついで素狄自筆の實驗記錄數十枚とその他の遺品を六月に調査した。これにより關西支部では七月例會を現地で開催し、且つ業績のあらましを三木理事が毎日新聞の泉州版に發表され、一部は原圖をそえ實驗治療誌に公表された。詳細は近く關係者によつて醫譚及び本誌に原著として掲載される筈である。鎖國時代に世界的な獨創實驗を行つた素狄の業績はかくして現代の新しい脚光を浴びて登場し、日本醫學のあり方を示すもとして大きな意義を與えるものである。

億川理事逝去

本會の長老として、また關西支部創立の大先輩であつた兆山 億川攝三博士は昭和廿七年來腦出血のため病臥中の處、廿九年六月十九日に永眠された。享年七十六。博士は周知の如く緒方洪庵の姻戚にあたり、皮膚科を專門とされたが、醫史學の造詣深く、傍ら詩歌をよくした。大阪の適塾保存には最も盡力された。このたびの長逝にあたり深く哀悼の意を表する。

和蘭醫話の研究 (三)

内山孝一

伏屋家の系圖から次に記す諸點が明らかになつた。

一、伏屋家はそのはじめ高階姓であつた。卽ちその先祖は光仁天皇寶龜四年癸丑二月、安宿に高階の姓を賜つて高階安宿と稱した。

二、高階家從つて伏屋家の紋は丸に抱柏である。

三、高階安宿から三十數代の後胤高階經仲の子が嘉禎二年(一二三六)泉州池田の首であつた池田長三良富重方へ入家した。池田の首の祖先は景行天皇の皇子大碓命の後であつて池田姓であつたがこの時高階姓に改めた。けれども後代まで池田殿と通稱した。

四、併し多少確かなことがわかるようになつたのは高階重仲からである。重仲は童名を經麿といひ、池田上村に住し帶刀を許された。重仲は天武天皇の皇子太政大臣高市の皇子の後胤高階眞人治部卿の後である。

五、重仲から十三代目の高階晴重は初め伊織後に長左衞門と改めた。慶長十九年(一六一四)六月十日卒、晴重院一譽淨西禪定門はその戒名である。

六、晴重の二代前の高階資正までは代々池田鄕を治めて來たのであつたが、資正は病身であつたので司職を辭して鄕士となつた。けれども村民は相變らず池田殿と尊稱した。

七、高階家從つて伏屋家累代の寺は池田下村の池田寺明王院である。

八、晴重の嗣は家重である。童名は長太郎、後に長左工門、家重ははじめ舍重といつた。寛永二年(一六二五)五月二十四日卒、享年七十七歳であつた。

九、家重には男子がなかつたので中村外記蓋庵の子を養子として迎えた。これが重正である。中村外記は初め蜂須賀阿波守に仕え知行三千五百石を領した。重正が高階家の養子となつたのは元和四年(一六一八)で十三歳であつたが片桐石見守がその媒酌をした。

十、重正は前條で記したように表て向きは中村外記の子と稱したが、實は豐太閤の家臣であつた伏屋飛彈守一安の長子

である。そのため重正の代高階姓を伏屋姓に改めたのであつた。伏屋重正ははじめ長太郎、後に長左衛門、晩年には無友と号した。重正は慶長十一年(一六〇六)十一月二十二日生、寛文十二年(一六七二)五月二十六日卒、享年六十七歳であつた。獨峯院無友重正居士。重正の妻は高階人吉重の娘千代である。寛文三年(一六六三)十月二十五日卒。養壽院淨光妙薫禪定居。

十一、伏屋重正には六人の子があつた。その長男が伏屋長左衛門重賢である。重賢は童名竹松といつた。重賢は泉郡々内三十六ケ村の觸頭をつとめ、苗字帶刀御免。重賢は契沖と宗因の條下で述べるように、卓れた文人であつた。元祿六年(一六九三)十月八日卒、智水院峯正不閑大居士。重賢の妻は荒木源太夫後冶の女で祿といつた。正德四年(一七一四)九月十六日卒、養蓮院淨香壽心法尼

十二、伏屋重正の次男、つまり重賢の弟安總が分家の祖となつた。

十三、しかるところ重賢には男子がなかつたので弟重直を養子とした。ところが重直にも男子がなかつたので分家伏屋安總の次男重榮を養子として本家をつがせた。

十四、分家伏屋安總の嗣は長男安直、權右衛門がついだ。安直は安貞ともいう。安貞にも嗣がなかつたので、吉村正近の三男正常を養子として迎え分家を再建した。この吉村正常が分家伏屋家をついで伏屋素狄となつたのである。素狄は初め政五郎又權右衛門といゝ、後に萬町權之進と改めた。文化八年(一八一一)十一月二十六日卒、享年六十五歳である。延享四丁卯の年(一七四七)十二月朔日に生れた。童名は久米松、嘉三、三十郎。十四歳(寶暦庚申十年)伏屋家養子となつた。服峯院周甸素狄居士。素狄の妻は竹田圓璡の姉で千せといゝ、寛政七年(一七九五)八月二十一日三十八歳の若さでなくなつた。妻千せには四人の女子があつた。智鏡院安室妙壽信女。素狄は後添えを迎えた。これに又四人の女子があつた。

十五、本家をついだ重榮の嗣は重以でわずか十八歳でなくなつている。重以から現代まで八代である。その系圖は次に示す通りである。これは私が最近すなわち昭和二十九年十月三十一日に堺に住んでおられる三木榮博士の東道で大阪府富田林市喜志に青谷正龜氏夫妻を訪ねてわかつたことの一つである。青谷氏は美具久留御魂神社宮司で同夫人龜代子は伏屋家

から青谷家に入籍した人である。

重榮―重以―勝重―安貞―┬―政芳―楠芳―礒芳―重芳―長者與門―┬―龜代子
　　　　　　　　　　　└―素狄　　　　　　　　　　　　　　　　└―長左衛門（死亡）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└―次男（死亡）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└―長光

伏屋素狄夫妻の位牌及び素狄の手錄五十餘枚等は現に青谷家に保存されている。このことは三木榮氏の探求によつてはじめて明らかになつたことである。私は今回の青谷家訪問によりはじめて素狄の研究手錄を手にとつて見ることができたことを限りない喜びとするものである。同行の石原明君に手傳つてもらつてそのすべてを寫眞にとつてくることができた。

なお大阪の中野操博士により浪速の醫者番付が各時代に亘つて數多く集められ、伏屋素狄及び大矢尙齋などのその當時に於ける醫者としての位置も判明して來た。右の手錄及び醫者番付については三木、中野兩氏から詳細に報告されることとなつている。私もそのうちにそれらを參考として新らしい史料によつて研究を完成したいと思つている。

伏屋琴坂の交友

伏屋琴坂はその當時蘭學者として有名であつた橋本宗吉（曇齋）の義兄であつたことは「和蘭醫話」の下卷にも見られる。又宗吉が長崎の通辭楢林九皐父子の面前で楢林がとり出した蘭書を卽座に譯述することのできたほどの蘭學の知識をもつていたことなどが記されている。この外に宗吉と琴坂との關係を示す文獻としては宗吉の譯出した「エレキテル譯說」及び「エレキテル究理原」に琴坂の序文が載せてある。これらにより二人の間柄は知られる。「エレキテル譯說」の序文は次の通りである。

「義弟橋（本）伯敏、エレキテル譯成る。余每に世人此器を近制するものを看るに、是れ唯兒戲にして愚を嚇すのみ。焉んぞ有用の具ならんや。蔑視して看みず。今、此譯を觀て始めて知る、此は是れ覆載の理を究むるの捷機にして、痼癈の治を明らかにするの早法たることを。良相良醫を益するの物、輕侮す可からざるなり。且つ採試中、兵學家に關係するもの許多なり。古へ手に龜せざるの方を用ひて戰に勝つ者あるを聞く。余、此器に於ても亦云ふ、向の蔑如は吾れ誤れり、

吾れ誤れりと。之に書して以て序と爲す。伏屋(素)狄撰」。

又「エレキテル究理原」の序には「西洋に一奇器あり。号してエレキテルと曰ふ。我が邦人、其の何物爲るを知らず。或は曰く、療器なりと。或は曰く、玩具なりと。抑々氣は質の精微なり。水土は質の粗顯なり。齊しく是れ一物、而も人は水土に疑を生ぜずして此に生ず(氣に生ず)。徒らに(此れ徒らに)見ゆる所を信じ、見えざる所を疑ふなり。故に氣を以て使用を爲す者有らば、則ち必ず聳然として之を恠しむ。甚しきは則ち以て君子の近づく可からざる所と爲すに至る。悲しいかな。吾が友橋本伯敏能く西洋の書を讀み、傍ら星學を好む。一日西洋書中彼の器物を說く者を得、之を譯す。乃ち其の言を試み、一々其の實を得たり。伯敏大いに喜び、自ら謂へらく、當今の人、皆精微の說を愛す。是を以て、西洋の書を好まざる者、幾んど稀なり。然るに其の傳の未だ博からざるは、其の言の實否未だ明らかならざるを以てなり。もし夫れ此を以て之を證すれば、則ち其の言の實、而して其の器の有用なること人々知る可し。豈愉快ならずやと。因りて其の試むる所を擧げ、記するに國字を以てし且つ交へるに圖書きを以てし、衆をして其の意を了解し易からしむ。苟も此の書を讀む者、其の器を用ふるの法闡然として、所要の義、直ちに領會す可し。是に於てか、梓して而して傳ふ。余亦同好を以て敢て一辭を冠するといふ。文化辛未(一八一一年)仲秋望月、和泉萬町伏(屋)素狄」

以上二つの序文には一方に「義弟」と記し他方に「わが友」と記しているが、これにより琴坂と宗吉との關係は學問上の親しい友であつたことがわかる。なおこゝにエレキテルとは電氣の意ではなく起電機のことを主として記したものである。橋本宗吉はショメールの「原生新編」その他からエレキテルのことを譯出したに止まらないで、實際に起電機を作り、之を組み立て、エレキテルの發生を試みている。これに對し琴坂が心からの共鳴と同感の意を表しているわけである。これは俱に事實を重んじていたからであつて、文書の上だけでなく、實際に證明して行くことに重きを置いていたことが右の二つの序文からも讀みとることができると思う。道具を作ること、技術を用うることが科學の研究に缺くことのできないものであることが述べられている。これは今から見れば當然のことながら、その當時の人々がエレキテルについては全く知らなかつた狀況にあつたことを思い合せれば、道具を作り出したということは重要なことである。道具を作ることに

ついては「和蘭醫話」の中にも特に述べられている。道具を工夫しこれを作つてそれを用いて實驗するという態度は宗吉と琴坂が共にもつていたのである。

橋本宗吉については記しておきたいことが多くある。關西方面特に堺とか浪速というところに於て町人のうち庶民の中から文化が起り、學問藝術の道が盛んに行われたことは著しい特色である。このことはわがくにの文化史にとつて重要な點であるといつてよい。橋本宗吉も亦町人から出た文化人であり卓れた蘭學者であつて、封建時代に何等の背景もなく、獨立獨歩庶民のために大いに氣を吐いたばかりでなく、わがくにの文化を大いに推進した事實を尊重したいと思う。

杉田玄白は「蘭學事始」のなかの一節に次のように記している。「一大阪に橋本宗吉と云う男あり。傘屋の紋畫く事を業として老親を養ひ世を營めりと。不學なれども生來奇才ある者故、土地の豪商ども見立て力を加へ江戸へ下して大槻玄澤が門に入れたり。僅かの逗留の間出精し其大體を學び、歸阪の後も自ら勉めて、其業大いに進み、後は醫師となりて益々此業を唱へ、從游の人も多く、漸く譯書をも爲し、五畿七道山陽南海諸道の人を誘導し、今に於けるいよ〳〵盛んなりと聞けり。江戸へ來りしは寛政の初年の事なり。歸阪の最初右の〔小石〕元俊も彼が志を助けて其業を勵ましめしとなり」。

この短い記述によつても橋本宗吉の面影を偲ぶことができるであろう。曇齋は橋本宗吉の号の一つであつて、幼名は直政といゝ、通稱は宗吉、後に鄭といつた。また伯敏、伯軒、糸漢堂などの号もある。彼は寶暦十三年（一七六三）に生れた。彼の先祖は阿波の國の那賀郡荒田野村に住み、父伊平（寛政六年十月十日歿）の代に大阪に移り住むようになつた。それは安永六七年の頃（宗吉十五六歳）と考えられるから、宗吉を大阪の人というのは大阪が生地だというのではなく、若い頃から大阪に住んだ人という意味になる。

若い頃は杉田玄白が記しているように傘の紋所を描いて生計としていた。彼の近くに蘭學に志をもつていた間五郎兵衛と小石元俊とがいた。間は豪商であつて天文學で有名な麻田剛立の弟子で長涯と号した。麻田剛立には解剖學上見のがすことのできない業績もある。剛立は後に高橋東岡と共に江戸に天文學者として召し出された。小石元俊は杉田玄白、大槻玄澤によつて蘭學の知識を學んだ人で、自らも解剖を試み、また杉田玄白の譯出した「解體新書」を講じて子弟の教導に當

り、關西方面に蘭學を普及した第一人者であつた。元來は永富獨嘯庵の弟子であつて、自らオランダの書物を讀解するに至らなかつたけれども、右に述べたような見識をもつており、大阪に於ける醫家として大家であつた。間と小石の二人がいたことは橋本宗吉にとつて幸運なことであつた。すなわち彼等は宗吉の奇才あることを認め、これに經濟的な援助を惜しまないで宗吉を江戸へ送り、大槻玄澤の芝蘭塾に入門させたのであつた。これは宗吉が二十八歳のときである。入門は僅かに一年ほどに過ぎなかつたが、玄澤門下の逸才である宇田川玄眞、稲村三伯、山村昌永などとその學才は匹敵したといわれている。後に小石元俊は宗吉を稱揚して「和蘭の言、凡そ六萬、四ヶ月にして既に四萬を暗記す。乃ち浪華に還歸す、試みに之を叩くに識果は浩瀚哀博なり」といつている。宗吉歸阪後は間、小石兩氏の仕事を助けていたが、文化元年になつて車町(塩町)に住み、糸漢堂という堂号をもつて醫の業を開き、傍ら飜譯に從いまたオランダ語を教授した。

このようにして文化から文政にかけて多くの譯書を成したのであるが、文政十一、二年の頃から大阪を避け安藝の國の賀茂郡竹原に遁れ、一時は醫業からも著述からも退かなければならなかつた。それというのは、文政十年六月に大阪で切支丹婆と呼ばれた豊田貢という巫女の事件が起り、當時の與力大塩平八郎に捕えられ、審理されたのであつた。豊田の連累者として橋本宗吉の門人藤田顯藏があつた。藤田はその當時禁制のキリスト教の書物を藏していたため、文政十二年十二月磔刑に處せられてしまつた。宗吉が竹原に移住したのはその連累を恐れて逃避したものと考えられている。しかし宗吉はその後大阪に歸り再び醫業も開き蘭學の教授もした。かくして天保七年五月朔日、享年七十四歳で病歿した。

そこで考えられることは、もとより伏屋素狄は直接右の切支丹婆の事件には關係はないが、橋本宗吉の關係から多少の影響を受たのではなかろうかということである。これはしかし全く想像にすぎない。「和蘭醫話」という本が出版されていながら世の中に今まで知られなかつたのは、伏屋家が大阪の邊鄙な山村にあつたことなどとも關係があるかもしれないが、琴坂は大阪にも出ていたのである。そうすると、切支丹婆の事件に恐れをなしたか或は遠慮して西洋に關係のある「和蘭醫話」の普及をしなかつたようなことがなかつたであろうか。「和蘭醫話」は初篇だけが出版になつて二篇三篇の出版に至らなかつたのも右の事情によるものかもしれない。記して後の考えに供したいと思う。

橋本宗吉の翻譯と著述は多數にある。オランダ新譯地球全圖一枚(寛政八年刊)、蘭科三法方典(文化元—十年刊)、內景洞視、ショメール奇方拾輯、トーマス解體書、西洋產育全書、遠西雜俎、糸漢堂製煉秘訣、エレキテル譯說、オランダ始制エレキテル究理原、泰西本草、西洋醫事集成寶函などがある。最近になつて宗吉の「三法方典」にも素狄の跋文のあることを知つた。そして宗吉を義弟と呼ぶ理由がはじめて判然とした。また素狄の蘭學の學統がわかつたように思われる。素狄の跋によれば偶々宗吉に逢う機會があり、それから兩氏の交友殊に深くあつたが、或時宗吉がいうのに素狄は宗吉より年長故これから義兄弟として立ちたいからという盟約を結んだことにはじまる。すなわち義弟宗吉が蘭學では先輩でこれ素狄からは宗吉に蘭學を教えてもらつたものと考えられる。すなわち素狄の蘭學は

前野良澤—大槻玄澤—橋本宗吉—伏屋素狄という學統であると見られる。

伏屋琴坂と長崎の通辭楢林九皐とが特別に懇意な間柄であつたことは「和蘭醫話」の中に記されていることからもわかる。その外、蘭學者齋藤方策、大矢尙齊、中川元吾、橘南谿、柚木太淳、益田睢軒などは友人である。柚木太淳の「解體瑣言」の中には次のように記されている。

「余(註、柚木自身のこと)頃ろ浪華に遊び萬町の琴坂家を主とし橋本伯敏と邂逅す。伯敏は番學(註、蕃學、こゝでは蘭學の意に用いてある)に長す。其の同學も亦集る。言、解臓に及んで曰く、近日、淡輪氏、古林氏各此の學有り、彼の覩ざる者有りと。琴坂、片山箕山の藏する所の番書(註、蕃書、こゝでは蘭書の意に用う)を齊して觀る。余垂涎すると雖も歸期已に迫る。遂に再遊を約す。」(原文は漢文)

柚木太淳は名は澆民、鶴橋と号した。父は太玄といつた。京都の人で世々眼科をもつて名のあつた家である。太淳は一日山脇東洋の藏志を見て發奮し、寛政九年(一七九七)に官の許しを受けて刑屍を解剖し、オランダの醫說を參酌して眼の病理と治療を明らかにし、眼科精義、解體瑣言を著わした。彼の言葉に「我が皇邦の德化日に敷き、蠻夷年に貢ぐ、其の藝術を採り、我が國の寶と爲す、蠻說も亦棄つ可からず」というのがある。彼の見識の一端を知ることができると思う。

享和三年二月十八日歿した。歿後の文化元年、門人の加門隆德が柚木眼科書(筆錄)を著わした。その中に眼球の解剖圖が載せてあるという。

初代の大矢尙齊は安永二年(一七七三)三月十六日に四十八歳で歿しているから「和蘭醫話」とゆかりのある人ではない。もと越前の人で名は弼、大阪で醫業を開きその名が高かつた。二代目の大矢尙齊が伏屋琴坂と友人であつて大阪で寛政十二年四月(一八〇〇)婦人を解剖したのである。これが「和蘭醫話」と密接な關係があることは前述した通りである。二代目尙齊は孝靖といつた人で、名は允、字は執中と稱した。

齋藤方策も亦伏屋素狄の友であつた。名は淳、字は堯父又は素行、看松齊又は孤松軒と号した。防州の人であるが、早くから浪速に出て小石元俊に師事した。大阪江戸堀に門戸を張るようになつてからは傍ら蘭學の塾を開いて子弟を教育した。解剖圖譜、痘瘡紀聞、船中備用方、肺病養生心得というような著述がある。嘉永二年(一八四九)十月八日七十九歳で歿した。

伏屋琴坂は橘南谿とも交遊があつた。南谿は著名な人でこゝで記すまでもないと思うが一般文化史上では東西遊記で有名である。彼は宮川春暉ともいつた人である。伊勢の人で、姓は橘、氏は宮川、名は春暉、字は惠風といつた。別に梅僊(梅仙)とも号した。京都に住み、はじめ香川太沖、賀川子玄、畑柳安を慕つて刻苦勉勵し、後朝廷の御醫として仕えた。彼は漢方醫術の古醫方に發し、物を先とし實に試みることの要を說き、その立場から解剖を行つた。彼は天明三年(一七八三)屍を解き、その臟腑を觀て、その著「傷寒外傳」に解剖の說を擧げている。その說くところは肝・心・脾・肺・腎・胃・腸・膽・膀胱・心包絡・三焦・榮衞・血室・精などであつて、形態のことから生理のことに論及し、且つ漢方醫術とオランダ醫學の說くところが折衷したところが多かつたが、その研究方法が粗笨であつたので誤つた記述が多いといわれる。

南谿は諸國を遍歷し山川の勝景を探つてこれを東西遊記としてまとめたのであるが、旅にばかりいたのではなく病人の診療もしたのであつた。文化二年すなわち和蘭醫話の出版された年に五十三歳で歿している。

研究餘錄

日本中世古版醫書年表(一)

石原　明

わが國に於ける醫書の刊行は周知の如く、堺の阿佐井野宗瑞が大永八年(一五二八)に明版を飜刻したのを最初とする。その後、慶長の終り(一六一四)までに出版された醫書はかなりの數に達する。中世末期から近世初期にかけての出版は營利事業として行われることは稀で、ほとんど犧牲的動機から文獻の流布を目的として行われたものが多い。この間にあつて醫師が自ら開版した書物が近世の文化の興隆に大きな影響を與えたことは、注目すべき現象である。はじめ、醫學の普及化の必要から行われた醫師の出版事業は醫書以外の書物にも及ぼされ、日本印刷文化史の上で近世初期の醫師の活動は大きな足跡を占めている。本稿は筆者が年來管見に入つたそれらの出版物のうち、特に醫書本草書のみに限り、慶長十九年(一六一四)までの年代明確なるもの、及び刊記なくとも版式上より明かにそれと推定出來るものを列擧し簡單な解説を加えたものである。未定稿であるから誤脫が少くないと思う。他日の補正を期する。

○大永八年(一五二八)

(新刊名方類證)醫書大全、十册、整版、

明・熊宗立著、本文二十四卷目一卷醫學源流一卷、堺・阿佐井野宗瑞開板、左右双邊十三行廿四字、縱六寸八分五厘横四寸七分、江戸初期の後印本二種あり。

○天文五年(一五七七)

(纂圖句註)八十一難經、三册、整版

明・熊宗立著、本文三卷圖一卷、越前一乘谷版、左右單邊、縱七寸五分横五寸五分

○永祿五年(一五六二)

本草異名記　附製劑記、一册、整版

曲直瀨道三著、横本、京都坊刻整版

○天正九年(一五八一)

切紙總目錄　二册、整版

曲直瀨道三著　二卷、元龜二年序、(未見)

○天正十二年(一五八四)

辨證配劑醫燈　二册、整版

曲直瀨道三著、三卷小本(未見)

○慶長元年(一五九六)

十四經發揮　一册、木活字版

元・滑伯仁著、三卷、四周双邊、九行十七字割注双行、本文活字は朝鮮字母による。縱七寸二分、横五寸五分、大黑口の板心、

○慶長二年(一五九七)

新編醫學正傳　八册　木活字版

明・虞天民著、八卷、四周双邊、十二行二十字、縱七寸四分横五寸四分、卷首のみ前書の朝鮮字母を使用、本文小字、元和八

年に整板にて覆刻出ず。

○同年

東垣先生十書　二十册、木活字版

元・李東垣著、三十二巻、四周双邊、十行十七字、割注双行、縦六寸五分横四寸八分この本叢書なれば零本單行のものもあり。

以上三部は小瀬甫庵(豐臣秀次侍醫、號道喜)の開版に係る。

○慶長三年(一五九八)

(歴代)名醫傳略　二册、本活字版

吉田意安著、二巻、坊刻、寸法失念

○慶長四年(一五九九)

延壽撮要　一册　木活字版

曲直瀬玄朔著、著者開版、無匡郭、平假名交り字高七寸五分、十行十七字、他に刊年なき十一行二十字本あり同じく活字版。

○慶長八年(一六〇三)

(新刻)雲林神穀　二册　木活字版

明・龔廷賢著、四巻、左右双邊、八行十五字縦五寸六分横四寸三分、この書刊行の時左を附刊したるならん。別個に單行本とみられること多し。活字、寸法同一

(新增)醫方大成發提　一巻一册

右二部一版、醫德堂守三(道三門人)開版

○慶長九年(一六〇四)

(假名)安驥集、十二册、整版

著者不明、十二巻、片假名交り附訓整版、道派叟の序あり、恐らくは開版者か。若狹國府版、寛永頃の後印本少からず、但し後印は刊記を削りたるもあり、刷り鮮明を缺く。(以下次號)

朝鮮疾病史(三)

三木榮

高麗疾病資料の現傳するは乏しい

高麗時の疾病を窺ふには唯一の現傳書「鄕藥救急方」に據る外はない。

第二章　高麗時代の疾病

高麗の疾病に關する知識は、新羅のそれを承け繼ぎ、宋醫學の流傳がありそれに影響せられて、凡そ文宗時から毅宗末に至る間(西紀一〇四七—一一七〇)に、(その後は漸次衰微したが)相應の發達を見たのである。依つてこれらに對し現代醫學の疾病分類の形式の下に解釋し、敍述する所がなければないのであるが、これが爲には相當豐富な資料が入用である。然し現傳資料は貧弱で、その目的を達成することは望むべくもない。故に本章では、高宗時(西紀一二一四—一二五九)に成つたと認められる唯一の現存醫書である「鄕藥救急方」に據つて、それに揭げられてゐる主要病名を抄出し之に註記を加へ(第一節)、更に「高麗史」その他文獻に散見される關係文を拾ひ(第二節)、又疫病流行史を說述し(第三節)、以て高麗時代の疾病の樣相を探るに止める。

第一節　「鄕藥救急方」に載せられた疾病

「鄕藥救急方」に據つて高麗時代の疾病の大概を窺ふこととする。この書は、書名にても判かる如く、鄕藥(半島產の藥のこと)を以てした救急治療法を收めた一冊の書である。高麗朝に於ける代表的醫書に當る仁宗時に制定された醫業式並に兇禁業式考講書(朝鮮醫學史第二編第二章第二節第四項(三)參照)及び「太平聖惠方」、(同第一項(二)參照)等は、高麗醫學を知る上に有力資料であるが、それは大陸のものであつて所謂原書に當り自國のものでないから、これらを以て高麗自體の醫學に充當せしめるわけには行かぬ。高麗固有醫學を採つてその書を解くに若くはない。依つて玆に「鄕藥集成方」を選んだ次第で、この書の外に知られたものが三、四部あるが、完全に現存するはこれが唯一の書であるから、不充分とは云へ、目下の所最も確實性を有するものと謂へよう。併しながら之に據れば、ただ民間に於ける疾病の大要を察知し得るに止まる缺點を有す

る。もとよりこの外に詳細にして學問的な症狀並に醫方が存在していたことは言ふまでもないが、之に就いては據るべき書を求め得ず、具體的に說き得ない。從つて今暫くは此の書に賴るの外はないのである。

依つて「鄕藥救急方」に揭げられた主なる病名及び症候を、その書の列載順序そのまゝに抄出し（治療方は略す）一考を加へる。

鄕藥救急方所載の疾病

現代の知識で理解し難い文字は、然るべく（……）を以て註釋を附し、又傍側に片假名で和名を誌るした。

上　卷

中毒

一、食毒、食中毒、食菜中毒。

二、肉毒、魚肉中毒、鱠不消（鱠は膾と同じ、ナマス）蟹（カニ）中毒、牛馬肉毒、狗（イヌ）肉中毒、六畜肉毒（六畜とは馬・牛・羊・雞・犬・豕のこと）、百獸肝毒、諸生肉中毒。

三、菌中毒（キノコの中毒）

四、百藥毒、砒霜毒（砒石を昇化したもの、亞砒酸）、巴豆毒（巴豆樹の種子から採つた油を峻下劑に用ふ）、烏頭・天雄・附子毒（トリカブトで半島到る處の山野に在り殊に北地に多い、根部にアコニチンを含み、塊根を草烏頭また烏頭と云ひ、その周圍に附せる小根を土附子或は附子と云ひ、天雄は附子の大きいものを云ふ、神經系統の疾患に現今でも好んで用ふ）、大戟・澤漆毒（共に鮮滿到る所の原野に遍生し、大戟はタカトウダイでその根を大小便を利するに用ひ、澤漆はトウダイグサでその葉莖は利水藥として用ひらる）。

咬傷毒

五、螫（ハチ）、蛟毒、蜈蚣（ムカデ）・蜂・蛇（ヒ）螫毒（螫は毒虫が刺（ハリ）でさし又た咬むこと）、虎咬、犬咬毒、蚯蚓（ミミヅ）咬、蝮蛇（ハサミムシ）・蚝螫（ケムシ）、馬汗及馬尾入人瘡中腫痛欲死、猘犬（セケン）（狂犬、狂犬咬は必ず狂を發し、死に至ると述べられてゐる）蜘蛛（クモ）咬、馬咬、蜘蜓（グヂグヂ）・蟻子（アリ）咬。

六、骨鯁（魚の骨が咽喉（ノド）に著いて呑吐が出來ないもの）。

七、噎食（ノドが塞がり食べられないこと）。

卒死

八、卒死、卒死無脈、鬼魔不悟(夢みて悟らないこと、)中惡卒死、鬼擊。

九、自縊死。

酒中毒

一〇、熱喝死、喝病(日射病・熱射病のこと)。

一一、落水死(溺死である)。

一二、中酒、過飲酒、大醉、飲酒不醉方、因酒咽喉及舌上生瘡。

一般外傷

一三、斷酒方。

破傷風

一四、墮損・壓笮・傷折・打破(笮は窄と同義)、被壓笮打破胸腹破陷、高墮落、墮下傷折煩燥啼叫不得臥、被打血槍心不能言、墮馬積血心腹唾血無數、被打破、被壓笮打毆瘀血在內心悶者、被擣腹中有瘀血、四肢骨碎及筋傷、從高墮下及爲木石所傷、墮落氣絕、筋絕、打損疼痛、破傷風(テタヌス、傷の手當と牙關緊急角弓反張の治療を簡單に述ぶ)。

金瘡

一五、金瘡(刀きず)、金瘡血出不止、金瘡血內漏不止、金瘡痛不可忍、金瘡腹破腸出(これには桑白皮の細きを以て縫ひ外に雞冠血を以て塗ると述ぶ、桑白皮を以て縫創に用ひたことは已に陶弘景に出づ)、鏃箭不出、金瘡腹腸出不能納之など。

喉痺

一六、喉痺(痺者腫痛之言也)、纏喉風及喉閉飲食不通欲死、喉閉無言、急喉閉逡巡不救則死、喉閉並毒氣、喉痺卒不語、馬喉痺(喉中深腫連挾壯熱吐氣數者とある、現代の咽喉ヂフテリアに該當するのであらう)、瘰癧。

口腔病

一七、重舌・口瘡重舌(重舌者舌下內如舌重付也現代の蝦蟆腫 Ranula に當る)、小兒重舌、木舌(舌癌であらう)、舌忽然腫塞血瀦胞狀滿口不理須臾死、喉中及口舌生瘡爛(Stomatitis aphthosa に當るのであらう)、舌生瘡爛(Glossitis)。

齒病

一八、齲齒並齒痛、養齒法、齒痛不可忍、齲齒、齲齒痛不可忍、牙齒不生、牙齒宣露柱出、齒有蟲孔、牙齒動搖、齒根腫痛不可忍、齒根下重者。

疔癰　發背　惡瘡　丹毒　瘭疽　附骨疽　皮膚病　痔脫肛

中卷

一、丁瘡、火丁(其狀如火瘡頭黑、四邊有煙燒又如赤粟米、切忌灸及大烙)、丁腫(丁は疔と同じ)。

二、發背・癰疽・癤・乳癰、發背(腫が背甲に起り、中頭は黍粟の如く四邊は連腫し赤黑く、或は痛み或は痒く人悶亂せしむと述ぶ背部の癰 Carbunculus である. 背疽とも云ふ)、發背癰疽初覺、發背癰腫已潰未潰、經日已上腫勢焮熱毒氣盛日夜痛、癰未有頭、癰有膿今潰、癰潰有惡肉者、乳癰(乳腺炎)、癰無頭。

三、腸癰(蟲垂炎の類を指す)、肺癰(肺膿瘍及びその類似疾患を指す)。

四、凍瘡。

五、惡瘡、多年惡瘡、濕癬白禿(シラクモの類を指すのであらう)。惡瘡遍身(李奎報の幼時罹つた疾患は之である)小兒頭瘡、小兒頭面身體熱瘡亂髮一團(皮脂漏性濕疹や多發癤症に當る)、項癰(Nackenkarbunkel)、小兒卒得惡瘡、熱瘡浸淫。

六、漆瘡(ウルシカブレである)。

七、湯火瘡、湯火燒爛瘡。

八、丹毒・癮?、風瘙疹?(蕁麻疹の類である)、丹毒、皮膚風痒。

九、伐指瘡(爪根炎の如きものに當る)。

一〇、瘭疽(伐指瘡の惡化し爛壞したもの Panaritium)。

一一、附骨疽(骨壞疽を指す、附骨成疽、俗云骨無甲)

一二、癬疥・瘡瘡、疥瘡(ハタケ)、癬瘡(ゼニカサ)、咼瘡(瘢痕のことか)等、一切無名瘡。

一三、箭鏃及竹木籤刺、箭鏃不出、箭鏃入腹不出、金瘡水毒、竹木尖刺癰疽熱毒、竹木刺肉中不出。

一四、痔漏・腸風、五痔(牡痔・牝痔・脈痔・腸痔・氣痔を云ふ)、下部卒痛如鳥啄、五痔大瘡、腸風下血(清血色鮮のものが下るを云ふ)腸痔下血(肛內結塊寒熱往來し、厠に登る時脫肛し下血するもの)、腸痔下部如蟲嚙、腸痔

大便常血下部痒痛如蟲咬者、痔頭出或痛不可忍、脫肛。

心腹痛 痢

一五、心腹痛(寒熱卒客於五藏六腑中、則心痛胸痺)、中寒心腹痛、九種心痛、心腹痛、蟲心痛、心痛不可忍。

一六、冷熱痢(痢色青者爲冷痢、赤黃者爲熱痢、但下白如鼻涕而腹絞痛氣塞難下者爲氣痢)、冷痢洞泄、冷痢腹痛、熱痢水穀俱下色黃、冷熱血痢、痢下血、氣痢下白膿日夜數十行全不進食、疳痢。(痢は赤痢症に當る)。

大小便不通 五淋

一七、大便不通、小便不通、大小便不通不可大下、小便不通臍下如鐵石、小便澁小腹築實。

一八、淋痢(小便澁不通也)、淋有五種、一者陰莖中痛溺不得卒出者石淋也(膀胱結石を指す)、二者溺有白汁肥如脂爲膏淋也又名肉淋(乳糜尿に當る)、三者溺難澁常有餘瀝爲氣淋也(尿道障碍が主症狀のもの)、四者溺留莖中數起不出引小腹痛勞淋也(奇異尿失禁 Incontinentia urinae paradoxa の類であらう)、五者如豆汁或有血結不通爲血淋也(血尿の類)、小兒淋若石淋、婦人淋、眠中遺溺不自覺(夜尿症の類である)。

消渴

一九、消渴、消渴卒小便大數非淋令人瘦(糖尿病を指すものと思はれる)。

二〇、小便下血。

陰(ヘルニア)瘡

二一、陰癩陰瘡、癩(ヘルニアである)、陰痒生瘡、女子陰瘡、婦人陰腫堅痛、陰腫大如斗(陰囊水腫や象皮陰囊腫を指すのであらう)。(陰瘡中には軟性下疳・癌腫その他潰瘍疾患を含むと思はれる)。

鼻病

二二、鼻衄、鼻衄過多、鼻息肉(鼻ポリープである)。

眼病

二三、眼病、風眼(ハヤリメに當るのであらう)、赤眼及瞼際痒、(Blepharo-conjunctivitis)、睛爲所傷損破、眼赤痛、風毒暴赤眼腫澁痛、風眼淚出、眼青盲積年失明(各種の內障症を意味す)、眼生赤白翳、眼睛突出一二寸、眼風赤澁痒、眼忽被撞着睛出、眼爲物所傷、肉弩、(Pterygium)、眯目澁痛不開、稻芒入目、麥芒入目、沙草粗目、草芒炒石等眯目不出、眼內外障。

耳病

二四、耳病、耳卒腫、耳內痛如刃刺(此風毒滯聚所致)、耳聹出膿、百節蜒蜒入耳、蜈蚣入耳、諸蟲入耳、耳聾、耳痛急有水出、卒痛不可忍、聹耳膿血出、耳內生瘡。

口脣病

二五、口脣病、口乾熱、口舌乾燥心神頭目不利、脣瘡、脣緊面腫、燔脣(口脣腫也)。

下卷

婦人病

一、婦人雜方、子死腹中不出、產後惡血不止或腹中塊痛、產後中風口噤牙關緊急手足瘛瘲(子癇或はテタヌスであらう)、榮衞不通經日不調、產後出血大多煩渴、婦人藏燥悲傷欲哭數次缺無故悲哀不止(ヒステリである)妊娠下血、產難三日不出、逆生、縱橫生不出、胞衣不出、倒產子死腹中、倒生子手足冷口噤、乳汁不出、婦人中風口噤舌本縮(妊娠食忌)。

小兒病

二、小兒雜方、小兒胎寒多患、夜啼或晝夜不止、小兒卒驚、小兒時氣病(時氣病は流行傳染病のこと)、小兒豌豆瘡(痘瘡である)、臍中生瘡、浸淫瘡(膿疱濕疹の類)、急黃面皮肉皆黃(Icterus neonatorum)、臍瘡久不差、癥(カヘ)瘕(ハラ)(「病源論」に、食飲消せず聚結內に在り漸次生長し塊段牢して移動せざるものを癥となし、推移するものを瘕と云ふ、とある)脫肛不縮、小兒卒死、舌上生白胞如雪(Soor である)、卒咳嗽、小兒痢、小兒食咬。

三、小兒誤呑諸物、誤呑釵、誤呑釘及箭鏃針錢鐵等物。

水腫

四、水腫、水氣遍身浮腫小便澁、水腫(Oedema)。

中風

五、中風、中風口眼喎斜(顏面神經麻痺)、中風口噤不知人(中風で人事不省のこと)、中風大便祕澁、脚重不能行步(この條に於て唐で新羅僧が彼國人の步行不能症に威靈仙を投藥し治した例が擧げられてゐる)、積年氣上如水病面腫脚不腫(心臟性喘息の類か)、白虎風腫痛(白虎痛とは、痛が四肢・骨節に在り晝靜かで夜發し虎の嚙む如きを云ふ、骨髓炎・骨膜炎の類を指すのであらう)、風轉筋(局所筋肉痙攣、コムラカヘリの類)、中風半邊不遂(Hemiplegia)

癲狂

六、癲狂、陽盛則狂・狂者欲奔走叫呼(Mania)、陰盛者癲・癲者眩倒不雀、狂邪發作、癲疾(Epilepsia)、癲狂(癲狂とは活動性のキチガヒ)。

七、瘧疾、(次節(一)の條參照)。

八、頭痛、頭疼欲裂。

雜病

九、雜方、白駸(Trichophytia)、面上黔黯(面皮が黑くなる病)、面上粉刺(ニキビ)、諸黃病、狐臭(ワキガ、胡臭とも云ふ)、鴉臭(カラス)、疣目(ウオノメ)。(以上)。

上記列記した病名並に症狀は、諸般の救急に必要な疾患を輯めて、略々その同似のものを採つて類別したのであり、日常の疾病知識の全貌が察知される。併しながら、總べて普遍性の病名・單一な症候・簡易な治法が述べられてゐるに止まり、病因—病理說などは知るべくもない。(病理說の概要は、「朝鮮醫學史」第二編第六章中で、使用の鄕藥材は、同第五章第三節で說明した)。

「高麗史」中に見られる疾病名

第二節 「高麗史」上に見られる疾病

高麗時代の疾病に就いて更に多少共知らうとせば、史書として第一である「高麗史」に據るが良策と思はれる。前節の醫人間に行はれる疾病名に對し、この書記載のものは史的通名と認められるから、時代全般からすれば一顧の價値はあるであらう。しかし「高麗史」に現はれた疾病關係記事は極めて少ない。この乏しい中から比較的頻出し又た注視せられる疾病數症を抄出し、疫病は改めて次の節で說くこととし、玆では若干の說明を與へて置くこととする。

瘧疾

(一)、瘧

叡宗十七年壬寅(紀西一一二二)十二月『李永(字は大年、安城の人、資方直であつた)李資謙ノ爲メニ韓安仁殺サルルニ坐シテ(永は安仁の妹婿)珍島ニ流サル、母子モ亦タ沒セラレテ奴婢ト爲ラントスト聞キ、酒一升ヲ飲ミ憤懣シテ卒ス。資謙、術士ヲ遣シ道傍ニ埋ム。時人之ヲ惜ム。牛馬敢テ踐マズ、或ハ瘧ヲ病ム者禱ニ就ケバ則チ癒ユト云フ。資謙、永ノ子ノ請ヲ敗リ改葬シ之ヲ掘ルニ屍變ゼズ』。半島正史上に瘧の字が見られるは、この條が最初と思はれる。瘧は上古から汎く存在してゐる疾患で、マラリアに當るのであるが、その他

瘧の治法

の類似熱性疾患をも含んでゐたであらう。然し前述した「鄉藥救急方」にも瘧疾の條があり、その治療法を載せ、藥材として柴胡・恒山・牛膝(この三材は古來漢方にて瘧疾の特效藥として賞用せらる)が擧げられてゐる。このやうに史書並に方書に瘧疾が見られ、然も當時に於て適格な鄉方による治療法が講ぜられてゐることは、瘧が高麗に廣く流行し人々によく知られた疾患であつた、と察し得らる。「鄉藥救急方」に載する「瘧疾」の全文を左に揭げて置かう。

「覃煮柴胡(鄉名靑玉榮、或云楮矣水乃立)根、不診多小隨意飲之、臨發及欲差時、飲卽效、又恒山苗細切片[2]、以水五升煎至三升、分爲三服、臨發服、欲差時更服(恒山一名常山、多生沙石地、叢生細莖、莖微黃赤色、兩葉相對、秋結實如小豆、淡紫色)又煮牛膝紫莖節一握、濃汁飲之。

疽發背

(二)、疽、瘡

顯宗二十年己巳(西紀一〇二九)十一月、『參知政事郭元、疽ヲ發シテ卒ス』。叡宗十七年壬寅(西紀一一二二三月二十三日、『王、忽チ背ニ微瘡アリ』。同三月二十四日、『王、不豫、山川神祇ニ禱ラシム』。四月七日、『王、疾革ル』。四月八日、『王、崩ズ。壽五十四』毅宗十年丙子(一一五六)三月、『金存中、卒ス、背ニ疽アリ、王、醫ヲ遣シテ疾ヲ問フ』。明宗十五年乙巳(一一八五)十二月、『李商老ヲ吏部尙書ト爲ス、嘗テ達官ノ疽ヲ患フモノヲ治シテ驗アリ、云々』。神宗六年癸亥(一二〇三)十二月二十六日、『王、背ニ疽ヲ發ス』。同七年正月十三日、『王、遂ニ崩ズ、壽六十一』。高宗十三年丙戌(一二二六)九月、「崔禹、瘡ヲ發ス。兩府ヨリ椽吏ニ至ルマデ皆ナ齊ヲ設ケ疏ヲ作リテ祈禱シ、都下之ガタメニ紙貴シ、諸醫モ能ク治スル者ナシ、閤門祗候林靖ノ妻ハ本ト醫家ノ女ナリ、引毒膏ヲ合シテ之ヲ貼ルニ效アリ、王特ニ靖ヲ工部郎中ニ除シテ以テ禹ノ意ヲ慰ム』。元宗十一年午庚(一二七〇)二月『林行、疽ヲ背ニ發シテ死ス』。恭愍王十四年乙巳(一三六五)正月、『德興君、背疽ヲ病ム』。

普通、癰は Carbunculus に當てられる、「鄉藥救急方」には『皮薄爲癰、皮厚爲疽、腫脹廣一寸已上爲

癰』、『俗云、發背』と述べ、「說文」には『疽、久癰也』、とある。依つて疽は癰の惡性のものを指すと解せらる。背部は皮膚が厚く脂多く疽が發し易く且つ惡性化するものが多い故に、單に發背の字を以て呼稱し一般化されたのである。瘴は瘇で腫に通じ、特に脛部が大きく脹れる症を指すが(「說文」)上記「高麗史」所載のものは疽と同一義と解される。疽及び瘴は新羅時にも見られ(第一章末文)、當時も恐れられた惡性膿瘍であつたのである。

淋疾

(三)、淋疾

忠肅王八年巳卯(一三三九)五月十五日、『夜、黄氏(洪戎の繼室)前王(忠惠王)ヲ邀ヘテ其ノ家ニ宴ス。前王、醫僧福山ニ命ジテ黄氏ノ淋疾ヲ治セシム。前王、常ニ熱藥ヲ餌ヒ、幸スル所ノ婦人多ク是ノ疾アリ』。

熱藥

熱藥とは今村鞆氏に依れば塗抹催淫劑で、餌ひとあるは口に食ふ意味でなく Penis に食はすとの意とのことである。忠惠王は好色家で、熱藥を常用し多數の婦人に幸し、幸せられた婦人は淋疾に罹つたのであるこの淋疾は明かに傳染性で、現代の Gonococcus に依る淋病に該當するものと思はれる。右の「高麗史」の文は短簡ではあるが、淋疾 Gonorrhoea の存在を示した點で重視せられるであらう。而して「鄕藥救急方」には淋疾の條があり、『小便澁不通也』と註し、所謂五淋(前節中卷一八の條を參照)を掲げてゐるが、傳染性に就いては述べてゐない。「日本醫學史」では淋疾は香川修庵の「一本堂行餘醫言」に述べられた膿淋を以て、日本で明かに性病と認められる嚆矢と論述されてゐる。忠惠王の淋疾は史書に載せられたものであつて、醫書に述べられたのでないから學的價値は低いが、然しこれは明かに性病の淋疾であり、この期にこれの存在を知り得ることは、性病史上の興味ある資料と認めらる。

忠惠王の淋疾は性病である

(四)、惡疾

惡疾は大概レプラに當る

明宗十五年乙巳(一一八五)十二月、『孝子散員同正尉貂ヲ閤ニ旌ス。父惡疾ヲ患フ、醫ノ言ニヨリ、股肉ヲ割キテ餛飩中ニ雜置シ、之ヲ饋リテ病稍々間ム。王、之ヲ聞キ貂ヲ閤ニ旌セシムルナリ』。

高麗時に於ける疫病の流行年次

瘴疫

惡疾とは單に惡性の疾患なる意に採れるが、上世からこれは概ね癩病 Lepra に該當し、高麗時代でも惡疾癩病は相當廣く存在してゐたと認めて誤はないと思はれる。又、「鄕藥救急方」の惡瘡の條に多年惡瘡があり、これは直ちに癩病に當て得ないが、この中に癩も含んでゐたと推察して大過がない。然も「病源候論」や「聖惠方」に癩の症候を論ずること詳かであるから、これらの書を用いてゐた高麗でも本疾患に對し可なりの知識を有してゐたと認め得られるのである。因に、股肉など人體を毀損し父母に窃かに食はしめその難病(この場合は惡疾)を救ひ間に旌せられた例は、大陸からの傳來の風習で(これは唐の開元中、陳藏器の選んだ本草拾遺に、人肉は羸疾を治す、とあるに淵源してゐると云ふ)、古く「三國史記」に見え(列傳第八向德・聖覺)「高麗史」にも右の外に度々載せられてゐる。

第三節　高麗疫病史

本節に於ては、高麗時代の疫病に就いて述べる。即ち「高麗史」に載せられた疫病流行年次を列記し(第一項)次いでこれらに對する概括說明を爲し又「鄕藥救急方」に見ゆる疫病を以て考察を加える(第二項)。

第一項　年　表

成宗十三年辛卯(西紀九九一)十月『王西郡ニ幸ス。民戶ニ疾疫ヲ以テ農業ヲ失フ者アリ、其ノ租賦ヲ免ズ。』

顯宗九年戊午(一〇一八)四月、『黃霧四塞、凡ソ四月、京城(開城を指す)ニ瘴疫ヲ患フ者多シ。王、醫ヲ分遣シテ之ヲ療セシム』。(是歲の疫は、「李朝實錄中宗廿年正月『歷代癘疫考』にも誌るされてゐる。)

顯宗廿一年庚午(一〇三〇)十二月『京城疫シ、人多ク死ス。』

肅宗五年庚辰(一一〇〇)六月『五溫神ヲ五部ニ祭リ、以テ溫疫ヲ穰フ。』(五溫神は都の東西南北中の五方に在つて疫病を起すとされた神、溫は瘟に通じ、五部は都内を東西南北中に分つた五區劃を云ふ。)

肅宗六年辛巳(一一〇一)二月、『溫神ヲ五部ニ祭リ、以テ溫疫ヲ穰フ。』三月、『五瘟神ヲ祭ル。』

睿宗四年己丑(一一〇九)四月、『近臣ヲ遣シテ朴淵及ビ諸神廟ニ禱雨シ瘟神ヲ五部ニ祭ル。仍リテ般若道場ヲ設ケテ以テ疾疫ヲ穰フ。』五月、『救濟都監ヲ置ク。制シテ曰ク、京内ノ人民疫癘ニ罹リテ死スルモノ多シ。宜シク救濟都監ヲ置キテ之ヲ療シ、且ツ屍骨ヲ收斂シテ暴露セシムル勿カレト。』七月、『我ガ國家、調兵多端ニシテ中外騷擾シ、加フルニ飢饉疾疫ヲ以テ怨咨遂ニ興リ、女眞モ亦タ厭苦ス、是ニ至リテ王群臣ヲ集メテ之ヲ議ス。』十二月、『有司ニ命ジテ松嶽及ビ諸神祠ヲ分祭シ、以テ疾疫ヲ穰フ。』

睿宗五年庚寅(一一一〇)四月、『司天臺奏シテ曰ク、今年癘疫大イニ興リ、尸骸路ニ載ス。請フ有司ヲシテ收斂セシメント。之ニ從フ。』

睿宗十五年庚子(一一二〇)八月、『夏ヨリ降雨ラズ、是月ニ至リ五穀實ラズ、疫癘大イニ興ル。五部ニ命ジ般若經ヲ讀マシムルコト三日、以テ疫癘ヲ穰フ。』

毅宗六年壬申(一一五二)六月、『飢饉疾疫人ヲ開國寺ニ饗ス』。

明宗三年癸巳(一一七三)四月、『巫ヲ聚メテ雨ヲ禱リ、近臣ヲ分遣シテ群望ニ穰ル。是時、正月ヨリ雨降ラズ、泉井皆ナ渴シテ禾麥枯稿シ、疾疫並ニ興リ、人多ク餓死シテ人肉ヲ市スル者アルニ至ル、又タ火災多クシテ、人甚ダ愁嘆ス』。(群望とは、望祭し柴を燔きて山川を祭ることを大規模に行うこと)。

緒方洪庵歌集(三)

秋　歌

立秋風

それとだに　まだしられねど　きりの葉に　秋をきそへる　今日の風かな

初秋露

おきまさる　露いかならん　秋はぎも　ちらぬばかりの　木にはあれども

七夕

七夕の　ながきちぎりや　一とせに　ひと夜はしげき　あふせなるらん

閏月七夕

あだ名のみ　たちかさねつゝ　天の川　あふ瀬をなみに　袖ぬらすらん

水邊女郎花

影うつす　かゞみの池の　女郎花　誰がためこふる　色にかあるらん

簷下萩

吹く風は　よしやどすとも　さびしさを　音になたてそ　軒の下萩

なか〳〵に　ふかぬ夜半こそ　さびしけれ　軒ばになれし　萩の上風

草花露

あしたこそ　花はえならね　しら露の　置きてひるまの　なきよしもがな

薄

秋かぜは　身にしむ小野の　枯尾花　かれにし人を　何まねくらん

蟲

われこそは　老のうきねを　なきあかせ　あなかま蟲の　何なげくらん

野徑蟲

行き暮れて　いそぐ末野に　鈴蟲の　ふりすてがたき　音をぞ鳴くなる

（草庵蟲聲）

はるけくも　なく蟲の音の　月こよひ　草の庵に　あはれをぞそふ

旅泊聞雁

とふ雁も　旅のおもひや　深からん　武庫のみなとの　浮寝にぞ鳴く

（秋夕）

いかにせむ　おもひやるせも　なく蟲の　弱り果て行く　秋の夕ぐれ

月似古

尋ね來し　里はむかし　跡絶えて　其夜に似たる　月のかげかな

田家電光

いなづまの　光に見れば　山田もる　かりほの露も　見えにけるかな

（草庵秋月）

かげのみは　よに變らねど　草の庵の　のきにふけ行く　秋の夜の月

（山家秋月）

さしいでて　軒ばにかげの　すめるかな　月もうきよや　秋の山里

（獨見秋月）

告げやらば　それと問ひ來ん　友もがな　ひとり更け行く　秋の夜の月

雲間月

をり〳〵は　もらす光を　たのめつゝ　はれぬ雲間に　更くる夜の月

月前述懷

秋ごとの　月見し友に　ひきかへて　數そふものは　袖のうへの露

月斜天未晴

かたぶける　月のおもこそ　見えざらめ　おもへばをしき　明方の空

月前竹露

よしやかぜ　月もるばかり　そよぐとも　吹きなみだりそ露のむら竹

月添秋思

なか〳〵に　憂きははらはで　露けさを　たもとにそふる　秋の夜の月

長月十二日の夜、惜月といふ題にてよめる

いかで疾く　かたぶく月か　長月の　半ばにもまだ　たらぬよながら

擣　衣

絶え〴〵に　おともよわりて　聞ゆなり　誰がさよごころ　打なやむらん

擣衣妨夢

あなにくの　夜半の砧や　古里の　夢路はるかに　うちさましつゝ

（菊）

おくれても　猶うつろはで　咲く菊に　なじとも君の　ならはざりけん

とし毎に　さかへまさりて　老松に　千代をくらぶる　翁草かな

（紅　葉）

散りしける　けさのもみぢや　あかつきの　寝覺とひつる　しぐれなるらし

（紅葉錦）

かすみてし　梢のもみぢ　さま變へて　今朝は錦を　露にしらかな

（池上紅葉）

かげみれば　散るともなくて　池水の　底より浮ぶ　岸のもみぢ葉

紅葉染水

からにしき　織るやもみぢの　龍田川　から紅ゐの　波立わたる

（御園秋）

御園には　秋も久しと　もみぢ葉の　深きめぐみの　色に知らるゝ

（難波津秋）

武藏野や　西に月見む　折々は　思ひも出でよ　なにはづの秋

（須磨秋風）

音きくも　そゞろにさむし　須磨の浦　おろすうしろの　山の秋かぜ

秋懷舊

もの思ふ　そでをむかしに　吹返し　しぐれぞまさる　秋の夕風

もゝとせの　むかしもかくと　夕月の　露けき秋を　そでに告ぐるか

水に葦の葉おひて鷺たてるかた

秋ふかみ　鷺のみの毛も　たつばかり　あしまさむけく　夕かぜぞふく

暮秋雲

眺むれば　心も空に　亂るなり　とまらぬ秋の　風の浮雲

殘紅葉

行く秋に　さそはれもせぬ　したもみぢ　山の嵐よ　こゝろしてふけ

枝かはす　紅葉に秋を　かる松の　ちらぬときはを　かすよしもがな

冬歌

初冬

問へかしの　もみぢば散りて　時雨のみ　おとづれまさる　頃となりけり

（落風葉）

吹きさそふ　あらしとだえて　いりあひの　音かすかにも　散る木の葉かな

木枯

もみぢ葉は　散りてむなしき　林にも　なほ木枯の　吹きさわぎつゝ

夜木枯

更けぬれど　なほこがらしの　風吹けば　寝よとの鐘の　音も聞えず

馬上時雨

むち打ちて　行くあら駒の　ひづめにも　おとらで過ぐる　村時雨かな

落葉不待風

風もなき　夕ぐれざまの　寂しさに　さびしさ添へて　散るもみぢかな

（散紅葉）

たのみつる　もみぢは散りて　下つ枝の　しぐれに濡れぬ　ひまなかりけり

（朝　霜）

あさりてし　鳥のあとのみ　色見えて　あをねが峯に　冴ゆる朝霜

（朝千鳥）

朝ぼらけ　あじろの霜の　さえ〳〵て　八十宇治川に　千どり鳴くなり

泊千鳥

寒けども　よたゞ語らん　友千どり　われも浮寝に　なきぬるものを

（山家霰）

板びさし　うつや霰は　なか〳〵に　音のさびしき　山ずみの庵

更くる夜の　かねもあらしに　音さえて　あられふるやの　軒ぞ寂しき

（草庵聞霰）

萱曙の　音せぬやどは　柴の戸に　うちおとづれて　あられ降るなり

江冬月

吹そよぐ　風にも波は　をさまりて　氷るいり江に　月のさむけさ

朝　雪

ふるとみし　夢のながりか　うつゝとも　わかで嬉しき　けさの初雪

山家雪

いつはあれど　おく山ずみの　静けさは　よにしら雪の　曙のそら

深夜雪

鐘のおとは　まださよ中の　窓の戸の　しらむぞ雪の　光なりける

（雪中鳥）

野も山も　雪にうづみて　ねぐらさへ　迷ふからすの　聲のかなしき

（松上雪）

埋れて　色こそわかね　若松の　千とせのかげは　雪にさへ見ゆ

しぐれにも　かはらぬ松の　みさをさへ　色うつろはせ　積る雪かな

閑居雪

あとつけて　こん人よりも　なか〳〵に　とはれぬ庵の　雪ぞしづけき

旅中雪

行なやむ　けふの山ぢも　しら雪に　ふるさと人を　思ひこそやれ

（寄雪歎老）

見るがうちに　積るとしらで　白雪の　身はふりつゝも　暮るゝ年かな

杜神樂

庭火たく　ひかりもそひて　月よみの　杜おもしろき　夜神樂の聲

炭　竈

のどけくも　なびく煙や　おく山に　炭燒く賤が　こゝろなるらん

春漸近

來る春を　待ちてわらはが　折るゆびの　數もすくなく　冬はなりにき

梅告春近

春はまだ　ほどありと思ふ　おこたりを　驚かしても　咲ける梅かも

歲暮梅

いづくより　來るともわかね　春もやゝ　近づきぬらし　梅が香ぞする

寄霜懷舊

さえ〳〵し　あしたの原の　霜よりも　かゞみに見ゆる　かげぞ身に沁む

歲暮

暮れて行く　としのなげきは　いひふりつ　とくも嬉しき　春の來よかし

除夜

かねの音も　いつしかふけて　惜しとおもふ　ことしも今ぞ　盡き果てぬめる

戀　歌

初　戀

うれしとも　うしとも末を　分けかねて　あやふくたどる　戀の山口

（待　戀）

ともすれば　それかとばかり　おとづれて　人まつが枝に　夕かぜぞふく

祈　逢　戀

とし月を　いのりわたりて　きふね川　うれしき瀬にぞ　けふは逢ひぬる

あふをかぎりと

いのちこそ　戀の果なれ　おろかにも　あふをかぎりと　思ひけるかな

忍　戀

洩らさじと　つゝみ〳〵て　しのぶ身の　こころにそむく　涙何なり

寄月忍戀

もらさじと　つゝむ袂を　求め來て　やどるもうしや　秋の夜の月

來不留戀

松が根に　寄りくる浪の　しばしだに　とまりもあへず　かへる君かな

（久　戀）

月をこえ　としをわたれど　はてもなし　おもへば長き　吾戀路かな

絶久戀

かたいとの　絶えて久しき　みだれより　逢はぬむかしの　忍ばるゝかな

切　戀

逢ふまでと　をしまれてしも　をしからで　きえねとし思ふ　我いのちかな

秋　戀

あるはたゞ　野山にのみと　思ひしを　人の心に　いつか立ちけん

被厭戀

長からぬ　花こそ人に　いとはれぬ　散らぬ我身ぞ　悲しかりける

寄月戀

かげやどる　月にも人の　ならはなん　誰ためかゝる　袖の露かは

寄繪戀

こひしくて　今はたもとも　くち木がた　かきみだしたる　思ひしるしも

おもかげ
忘られて　今は久しく　なりし身に　などおもかげの　離れざるらむ

忘れむと　思へばいとど　たちそひて　こひしさまさる　人の面影

例會記事

昭和二十九年三月總會開催後、東京に於ては八月を除き、毎月次の如く例會を開いた。

○昭和二十九年四月二十四日

東洋醫學雜感　森田幸門

江戸時代に於ける日の吉凶と醫事衞生　赤松金芳

○五月十三日

小川理事壯行會を兼ねて本郷湯島・江知勝に於て開催。講演は

日本眼科とポムペ　鮫島近二

○六月二十六日

日本東洋醫學會關東地方會と合同にて開催、京橋・中將湯ビルにて講演終了後、東京ステーションホテルにて懇親會を開いた。本會よりの講演は五題

田代三喜の坐像とその著書について　矢數道明

古方派と後世派　和田正系

傷寒論と經絡　大塚敬節

東洋醫學の根本文獻「黃帝內經太素」の著作年代　石原明

山脇東洋の仕事　內山孝一

ついで東洋醫學會側の證についてのシンポヂウムがあつた。

○七月二十四日

解體新書の附圖の扉繪について　大鳥蘭三郎

喜多村拷窓について(その二、著書)　安西安周

○八月は暑中につき休會

○九月十八日

舊幕所藏蘭書發見の經緯　朝倉治彥

江戸時代に日本に輸入された蘭書　板澤武雄

當日上野圖書館所藏の新發見の古渡蘭書約四千册を見學、主要なものを供覽した。

○十月十五日

第十四回國際醫史學會議に出席された小川理事の歡迎會を江知勝にて開催。席上小川理事の歸朝報告及びスライドによる供覽が行われた。

○十一月十三日

鎌倉時代の醫學教育　石原明

伏屋素狄自筆記錄の發見　內山孝一

喜多村拷窓について(その三、學術)　安西安周

○十二月十八日

日本橋丸善に於て開催中の洋學ことはじめ展を見學、記念講演會に參加した。

慶應二年にオランダで出版された日本人の書翰　板澤武雄

長崎夜話草所載のじやがたら文　岡村千曳

ヘーグ國立古文書館採訪記　岩生成一

○昭和三十年一月二十四日

佛教經典にみられる受胎說　杉田暉道

イタリア解剖學の古蹟を訪ねて　小川鼎三

以上開催場所の明記なき例會はすべて文京區駒込片町の醫齒藥出版株式會社會議室に於て開いたものである。なお、東京における例會の通知は都內及び近縣在住の會員のみに限つているから、地方の方で例會通知を希望される方は御一報願いたい。

編集後記

○毎號發行が遲れたお詫びと、資金のないグチばかり列べて恐縮であるが、常任幹事の努力が足りず理事長以下役員の方々に御迷惑をかけ、會員各位に對しても申譯がない。

○總會もいよいよ迫り、遲れている雜誌を早く出し抄錄も早く送りたいと、心はせいても經濟的に何の見通しもつかず、關西の地元の大學に獨立講座もないので總會經費をヒネリ出す豫算もなく、奉加帳を廻すのもお互いに有難くなし、ないないずくしはともかくとして豫定通りには抄錄號も出したいと思つている。

○復刊以來、會費納入について不便をかけていた振替口座を、戰前の番號のまゝ復活した。

振替口座　東京一五二五〇番

地方の會員の方は今後振替か又は爲替・現金書留、何れかによつて會費の納入を願いたい。

○億川理事の長逝は何としても惜しい。後任というわけではないが、今度の總會に多大の努力をつくされる阿知波評議員を理事に改めてお願いした。これは昨秋十月、内山理事長が西下の節に動議が出て十一月の役員會で決定したものである。

○昨年は醫史學會にとつて多事な年であつた。續々と新史料が發見され、また國際醫史學會議に參加するなど、復活第一年としてはまず幸先がよかつた。今年はより以上發展の年でありたい。總會の演題も三十八題の多きに上り、今から盛況が期待される。

○それにつけても經濟的に弱い本會のため、心から總會準備に努力を傾けられている關西支部の役員各位、とくに中野・大矢・三木・阿知波各理事の勞を多とし、改めて紙面をかりて今後の後援をお願いする。

○第五巻の牽引は終號の第四號につけるべきであるが、今回はこれを總會抄錄號としたために第六巻第一號に廻すことになつた。御諒承を乞う。

○最近發行又は近刊豫定の醫史學關係の文獻を御紹介する。これらは總會々場でも頒布するつもりである。何れも限定版、殘部僅少。

○洋學ことはじめ展目錄（蘭學資料研究會編）上野圖書館參考課扱、送料共一二〇圓。

○富士川游先生傳（同刊行會編）東京都文京區駒込片町三六　醫齒藥出版社扱　送料共四百圓。

○各藩醫學教育展望（山崎佐著）醫齒藥出版社扱、總會發表資料、送料共一五八圓。

○明治前日本醫學史（學士院同編纂會編）學士院内日本學術振興會扱、全五巻の内第一巻（序論・解剖學史・疾病史）三月下旬出來、豫價八百圓、第二巻（生理・病理）五月上旬出來、豫價同上、以下續刊本年中に完結。（石原）

日本醫史學雜誌　第五巻第三號
昭和三十年二月二十五日印刷
昭和三十年三月一日　發行
編集兼發行者
東京都板橋區大谷口町七二四
日本大學醫學部内山生理内
日本醫史學會　石原　明
印刷所
東京都北區西ヶ原三の四六　杏林舍

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the

Japanese Society of Medical History.

Vol. 5. No. 3. March, 1955.

CONSENTS

Original articles

Studies on the bibliographical Charactor of "Shih-liao pn-tsao" that was found at "Tun-huang" (1)……Kōzō Watanabe…(1)

Medical book for emergency of Tokugawa era.……
……Toyohiko Miura…(9)

"Ran-ryō Zenji", teacher of Dr. D. Nagatomi.……
……Sukeichi Tanaka…(13)

Studies on the "Oranda-Iwa" (3)……Kōichi Uchiyama…(15)

Studies on the history of diseases in Korea(3)…Sakae Miki…(25)

Literature.

Anthology of Japanese Poems by kōan Ogata……(36)

Memo

Chronology of the medical book press in middle ages of Japan(1)……Akira Ishihara…(24)

The Japanese Society of Medical History

(Department of Physyology. Nihon Univ. School of Medicine.)

Itabashi. Tokyo, Japan.